

[森・神・ココロ] 目次

まえがき	(樹霊)(森の神)	
I 部	古代の森と日本人	4
1章	縄文時代	
1・1	自然の姿と日本人 (人の登場)(気候と樹種)(自然と文化圏)	
1・2	森の暮らし (食べもの)(木の利用)(人が使った森)	7
1・3	森と神様 (空へ)(空から森へ)(森で生まれた思想)	10
1・4	縄文人のココロ	14
1・5	西日本の縄文晩期	15
2章	弥生時代	
2・1	気象と農耕	18
2・2	稲作の発展	19
2・3	主食は米だったか	20
2・4	森と農耕 (森の養分収奪)(鉄と木炭)(木の利用)	21
2・5	森林信仰と農業 (木と霊と農作)(龍と巨木)	23
2・6	弥生人のココロ	25
3章	古墳時代	
3・1	聖なる森の喪失 (時代区分)(森と人の関係の変化)(人口の爆発)	
3・2	人の暮らし (技術開発)(森の破壊)	29
3・3	古墳と信仰	
3・4	森と神様 (神道の始まり)(神道以前)	

I 部で参考とした本

II 部 生命記憶・森の思想

1. 森の思想(鈴木秀夫氏の説)

1・1	前線の移動	33
1・2	砂漠の思想	34
1・3	森林の思想	35

II 部で参考とした本

2 章	生命の記憶	38
2・1	動物の体に残る進化の痕跡 (三木茂夫へのオマージュ)	38
2・2	生命記憶	40
3 章	ココロの記憶	
3・1	ココロとアタマ	42
3・2	ココロのリズムに残る永遠	44
3・3	森は日本人の生命記憶か	45

III 部 精神性と森の維持

1 章	森林の状態 (古代) (中世) 近世	参考にした本
2 章	植林と精神性(17世紀まで)	53
2・1	森と水	53
2・2	社の森	54
2・3	神を感じて森を造る	55
2・4	儒教と植林	56
3 章	森の利用と造林思想 (17世紀以降)	58
3・1	徳川時代----森林管理の始まり (利用制限)(伐採)(植林)(期待と成果)	58
3・2	明治の改革 (地木結合論)(地木結合論と伝統的自然観)(明治神宮の森)	62
3・3	第2次大戦後の森 (伐採不可能の森)(経済的問題)(広葉樹造林)	66

III 部で参考にした本

数億年も前から木は地球に生えています。人は数百万年の歴史しかありません。日本列島がほぼ今の形になったのは 1500 万年の昔です。最近数万年は氷河期の余波をうけたとはいえ、木の生え方に今と大きな違いはないそうです。

その数万年だけを取り上げてみます。日本人はそこで過ごしました。生活は大変に変わりました。旧石器、縄文、弥生、古墳、律令の時代と移っていきました。日本人のココロがどう変わったか、私の関心はそこにあります。その間に森は変わらずあったけれど、森との関わり方が変わった。だから森の影響を太古には強くうけても、そのあとはココロの働きが変わったとの考えもありえます。

私は日本人のココロの働き、それに突き動かされたアタマの働きは余り変わらなかったのではないかと考えて、色々な本を読んで、考えを整理してみました。話題になる範囲が広く言葉の使い方が曖昧になりそうですが、定義はなるべく避け、常識的な話題とするよう努めます。一つだけ、ココロという言葉の私の使い方を説明しますが、ココロはカラダと対になる言葉ではなく、アタマと対になる言葉として使います。カラダと対になる言葉は霊とします。

人のココロが森の影響を昔強く受けて、今もそのあとをとどめていると、ココロは受けた影響を、森に反応する仕方に強く表すと考え、身近にある出来事に例を探してみました。

(樹霊)

神社で見かけますが、太い木に注連縄（シメナワ）が回してあります。注連縄で木を崇拝する心を表していて、日本人に起こりがちな気持ちは巨樹に人格を感じ、霊が宿っているというのではないのでしょうか。巨樹は自分の知らない 100 年前、500 年前を見ているから、尊敬したくなる。畏怖の感情もありましょう。畏怖は、神へも抱くから注連縄を回すことと結びつきます。

「樹霊」という本が 1976 年に人文書院から出ています。司馬遼太郎や

梅原猛など著名な方に依頼してもらった短い随筆を集めたものですが、中々の力作が多く、「樹霊」という一つの題に 50 人（実際は重複があり 47 人）の方が挑戦している感じで、勝れ本ですが、内容を読むと、3分の2ぐらいの方は樹霊をまともに取り上げています。信じる度合いは違っても「樹霊」じゃ無視できない、事実だと感じます。

樹霊の話は、宮本又次氏の文にまとめられているのが勝れていると思うので引用します。

「巨樹・老樹を神聖視し、これをあがめたり、それを伐ったりいためたりすることによる祟りをおそれる習性は、わが国には古くからあった。

元来は一本の樹というよりも、樹林であり、森であったろう。森はモリ＝マモリ（守）に通じ、それ自体が鎮守になり、聖地になった。対馬のシゲや若狭大島のニソの杜などその例であろう。（以下省略）」

民衆が樹に神を感じる素朴な風俗は古来続いています。巨木には霊魂が宿るとする素朴な感じのほか、宗教的には 神が木に降下する、依代（憑り代）という言葉で表される理解があります。日本で依代は木か石です。これらが普通で、どこにも書いてあります。

民俗学者の調査だと。もう少し違って大地の生命力が登って木に宿っている、とみなした方が適切な風習もあるとのこと。例えば森の木を切ったあとで、梢を切り株に 立てるトブサタテという伐木の儀礼が木曾などにありますが、これは梢に宿った生命力を大地に返す気持ちと考えられます。（金田久璋「森の神々と民俗」 p 256）

森や木の影響を受けて作られた日本人のココロが今なお森や木に対して敏感であるのをこれらの例はしめしていきましょう。

（森の神）

森が人のココロに働きかけているような作例を探してみたら、奈良の春日神社で起きた事件がありました。春日の裏山は西暦 841 年から切られていない原生に近い林です。そこはコジイ、ウラジロカシなど照葉樹林で出来上がっています。

この林が希に一斉に枯れるのです。似た現象は八ヶ岳横岳ロープウェイ

の終点付近にもあるのを知っていますし、きっと日本各地にあるでしょうが、平安末期にはこれが神の怒りの現れだとして大変恐れられていました。著名な話として 1304 年の出来事があります。鎌倉幕府が奈良に地頭を置いて管理しようとしたので、春日神社と密接な関係がある興福寺の寺僧が大いに嘆き、そうしたら 7 月というのに春日の山の木が急に枯れはじめた。これは 768 年のご託宣「神事に違例し、政治を行なうと、木が枯れ、神は天に帰ってしまう」が具体的に現れたのだ、と噂がながれました。9 月 28 日の夜、気象に異変が起き、それを人びとは神が去っていくものと恐れました。幕府は異変の前に既に地頭を置くのを取り止めました。

この話から森に神が住んで、管理しているというのが、極めて現実的な感じとして人々の間にあったのがわかります。

これが興福寺側の策略かもしれない、との考えは成立します。枯槁と呼ばれた現象は中世に七～八回おきていますが、そのすべてが本当に枯れたのかどうか、疑わしいようです。でもそのたびに、行政側が何らかの反応をしていますから、森に神が住んでいると、多くの人が心底信じていたと考えてよいでしょう。(瀬田勝哉「木の語る中世」一朝日選書)

日本人のココロは森や木に強く反応しているようです。そんなココロがどんな経過で作られてきたかをこれから探っていきます。

I 部 移り変わる日本の森と日本人

森は有史前から日本を支配していました。日本人はどこから移ってきたにせよ、その周辺や内部で暮しました。その期間が数十万年はありました。縄文時代以後は研究も多いので、暮らし方や森の有様も空想の種を育てる程度にはわかっています。森と人の暮らしを調べて、どんなココロが育ったかを考えてみます。

1 章 縄文時代

1・1 自然の姿と日本人

(森と人との関係)

森は人間より古くからありました。その森にも先輩、後輩があります。木は大きく分けると葉の細い針葉樹（スギ、ヒノキ、マツなど）と葉の広い広葉樹（ブナ、シナ、シイなど）があり、針葉樹は2億年前にもう地球上に育っていました。ところが広葉樹は例の恐竜の絶滅があった6500万年前以降に地球に登場しました。

日本列島の誕生は更にその後です。

日本列島の地質は、日本海側では大変古くて六億年にもなるけれど、太平洋側に向かって少しずつ、出来た時期は若くなっています。このことは、日本列島の下、海の底を作っている岩盤であるプレートが太平洋側から沈み込んで、その分列島が隆起し、海上に現われ、400キロも太平洋側に成長したからと説明されています。「新しい地球史」(神奈川県立博物館編)

今から1500万年前に列島は大陸から離れ、日本海ができました。そうすると木はスギは勿論、ブナでさえ、日本列島の誕生以前に既に生えていて、大陸が離れていくのを眺めたことになります。

ところがヒトの歴史は500万年以上遡れません。木にとって列島は誕生でも、人にとっては前にあったもの、つまり存在です。

列島誕生後も、地球の寒冷期には海が凍って大陸と列島が陸続きになったことがありました。最近では2万年前から13000年前の間には北ではシベリアと、南では朝鮮半島と繋がっていました。だから人や動物は大陸か

ら歩いて日本にこられました。

人類（ホモ・サピエンス・サピエンシス）の形成は 10—30 万年前だそうで、南アフリカの山中と考える学者が多く、そこから移動し、西アジアで彼らは発展したようです。始め人類は皆均質な体形をもちましたが、7 万—7, 5 万年前に始まった最後の氷河期（ウルム氷河期）を経過する内に人種が形成されたそうです。

日本人が属するモンゴロイドは中央アジアから東進し、ウルム氷河期の最中、酷寒の大陸で鍛え上げられた一族は後に弥生人になるのですが、その一部は極寒期にも東に向かって移動し続け、東日本人の先祖となった、と云われています。俗に南モンゴロイドまたは土着の縄文人と呼ばれる人です。彼らは縄文文化が始まる、今から 12000 年前より更にずっと前から日本に住んでいたのは確かです。

縄文期の始めは 12000 年前です。日本はその頃、国土の全体が森で覆われていました。いまの関東平野も大阪平野も森です。日本に稲作農業が発達したのは紀元前三世紀、今から 2300 年前です。その間約 1 万年は、程度の高い文化を持つ縄文人が狩猟、採集を生業としていました。

（気候と樹種）

縄文時代もそれ以後も木の種類は同じです。

日本の森は 4 種と大まかに憶えておくと便利です。その内 3 種が広葉樹、落葉するもの 2 種、冷温帯（ブナ）の森と暖温帯（ナラ、クリ、シナ）の森、常緑のものは 1 種（カシ、タブ）です。針葉樹は、亜寒帯に生えるもの（エゾマツ、トドマツ、カラマツ）1 種です。その他スギ、ヒノキ、マツなど有名な樹がありますが、これらは当時森の主になるほどの規模ではなかったから、大きく考えるときには考察外です。これら 4 種の森の分布は、12000 年という長い期間で見ると、大変化しています。今は地球レベルで見ると寒い時期です。縄文時代は寒い時期に始まり暖かい時期を経過して再び寒い時期に入って終わり、弥生時代へと変わったのです。だから特定の土地、たとえば中部山岳地方で見ると森の木の種類は針葉樹、落葉広葉樹、常緑広葉樹、落葉広葉樹と変わりました。

安田喜憲さんの研究（鈴木秀夫「森林の思考・砂漠の思考」から引用）によると、縄文の初期、12000年～10000年前は寒く、亜寒帯に生える針葉樹（エゾマツ、トドマツなど）は中部地方の山まで発達していました。10000年～6500年前には温暖化が進みこれらは仙台より北の山に後退します。縄文文化の花が開いた6500～4500年前（縄文前期）では更に後退し、北海道だけに生えました。

広葉樹側から見れば事態は逆です。暖かい縄文前期には常緑の広葉樹林が急に本州中部まで支配するようになり、この形は寒くなっても急ぶ様には変わらなかったようです。関東も中部地方も多くが常緑の広葉樹の支配下にありました。それより北が落葉の広葉樹林です。縄文晩期（3500年前～2200年前）には常緑樹広葉樹は若干交替し、中部地方で落葉広葉樹と接していました。太平洋も日本海も海岸沿いではもっと北の方まで、常緑広葉樹が生えていた証拠があります。

このように温暖化、寒冷化で四種の森林が列島を北と南へ行ったり、来たりしながらも、日本はいつも森に恵まれていました。そのことが大事です。

（自然と文化圏）

縄文時代の自然の姿は今とは大分違っていました。鈴木秀夫は地理学が専攻ですが、その著（森林の思考・砂漠の思考）でこんな主旨のことを書いています。

「縄文の前期（今から6500年前から4500年前まで）は氷河時代終了後の最高温期にあたっている、今と比較しても年平均気温2度ほど高温であり、旧石器時代の最寒期にとくらべれば12度ほど昇温していた。この上昇によって海岸では、大陸の上の氷河がとけて流入したため、海面が高くなって陸地に侵入した。現在、海に注ぐ河口で都市をのせている平野の多くはみな海中に没していて、日本列島は入江の多い、いわゆるリヤス式海岸がおおくなり、そのため、縄文人の漁業に依存する割合が前より高くなっていたと考えられる。」

この時代、七つの文化圏が成立していたことが考古学の方で知られてい

ます。これはほぼ当時の植性圏、つまり植物の生え方と一致しています。

遺蹟数から推定した縄文中期（4300年前）の人口分布（小山修三「縄文学への道」）を7つの文化圏に割り振って、わたしは次の表を作りました。

亜寒帯針葉樹林の文化圏	推定なし
落葉広葉樹林Ⅰの文化圏（東北）	・ ・ 46700 ・ ・ ・
落葉広葉樹林Ⅱの文化圏（東北南部	・ ・ 238600 ・ ・
落葉広葉樹林Ⅲの文化圏（関東半分、北陸、中部）	191900 ・ ・ ・
261300	
常緑広葉樹林Ⅰの文化圏（関東の東半分）	(500) ・ ・ ・
常緑広葉樹林Ⅱの文化圏（東海、近畿、中国、四国）	17400 ・ 22700 ・ ・
常緑広葉樹林Ⅲの文化圏（九州）	5300 ・ ・

以上の植性のうち常緑広葉樹林Ⅰはカシ、シイのほか、落葉のクルミ、ナラも含むところですが。落葉広葉樹林Ⅲはブナ属、ナラ属で、ここに人口が集中しています。

縄文期の推定人口 26 万人の内 9 割りが落葉樹林に住んでいたことになります。当然食物が多かったといえます。寒冷期でも落葉広葉樹林では木の実が豊富で、木漏れ日も多く、狩猟用動物たちのよい住みかでもあったから、人々は楽な日々が送れようです。これと比べ、常緑広葉樹林ではシイの実など生活必需品はあったものの、鬱蒼として暮らしにくかったようです。私たちの祖先はこうした地球規模の温暖化の中でも、木々の中で生き長らえることができました。

この期間は今考えた範囲だけでも1万年になりますし、その前、多分5万年以上似た状況だったようです。

1・2 森の暮らし

(食べもの)

彼らは何を食べていたのか、この疑問に小林達雄氏は「堅果が主食だけど、多種多様な品を食べた、いや食べる工夫をしたのが、縄文人の特色だ」

と論述しています（「縄文人の世界」 P71）。この本をみると森林の中での生活なのに、なるほど、こんな工夫もあったかと思えるほど、多様なものを食べ物としています。「自然の人工化」と小林氏が呼んでいるように、自然の中に 人工的なものを作る農業という形態はとらず、自然の多様な産物に様々な工夫をほどこして、季節や場所に応じた、人工化を行なっているのです。

彼らの遺蹟から発見した食料を数えると、哺乳動物 60 種以上、貝類 350 種以上、魚類 70 種以上、鳥類 35 種以上、植物性食料 55 以上にもなりました。これらを貯蔵する保存技術も持っていました。

この時代の特色は森の堅果が主食だったことです。また狩猟の対象となった動物だって森の草木で育ったから、森は食の対象としたと考えていいでしょう。勿論海への依存も場所によっては大きかったし、川を上ってきたシャケも大事な食物でした。

小林達雄氏の説（上記書、P72）では、こういった個々の食物の種類に特色をみるより、多種多様な食料の利用を意図したこと、これを「縄文姿勢方針」と呼んでいます、それが縄文人の食生活では特色だったとのこと。このお陰で特定の食料源が欠乏しても 困らなかったし、偏食をしなかったため、特定の生物を死滅させる こともなく、これが食の安定につながったと考えています。

これらは縄文中期（前 4500～3500 年）の研究では中部山岳地帯の文化に目を向けて行なわれましたが、近年、青森の三内丸山に巨大遺蹟が発掘されて、従来の縄文像が大きく変わってきました。ここは平地でヒエの栽培が積極的に行なわれていたことがあり、山岳でのドングリ採取に匹敵しています。それに海辺にあったので海洋資源を大いに利用しています。サケ、ニシン、イワシ、アジなどを季節ごとに大量にとり、保管しておいて、交易にも使ったようです。（小山「前著」 P167）

（木の利用）

木は腐るから遺蹟として殆ど残りせん。だから石器や青銅器のように注目されず、評価が不当に低いのは残念ですが、石の刃で何を切ったかを思

うと、木が使われたのを思いつくのは自然です。木が水の中では腐らないのは別に目新しい発見ではありませんが、近頃、水に浸かった古い木が発掘されて、木の文化があったことも実証され始めました。福井の三方にあった鳥浜遺蹟でのことで、これは今から 6000～5500 年前、縄文前期のもので、使った木の用途は

生活全般に涉っています。船、櫂、板、棒、杭、容器、弓、尖り棒などに使っています。（森川昌和「縄文人の知恵と生活」日本の古代4）木で家を建てるのに使った例はもっと古い遺蹟で見つかっています。

2200 年前の「はさみ山遺蹟」で大阪の藤井寺にあります。直径6メートルほどの大地を 20 センチほど掘り下げ、その周囲に柱をたてて屋根を葺く形の竪穴住居の跡です。柱は 10 センチ程の太さだったようで、これは今のプレハブハウスの柱と同程度の太さです。

巨木の遺蹟が石川県金沢の「チカモリ遺蹟」で見つかりました。縄文後期から晩期にかけての遺蹟で、太さが 85 センチにもなる柱の下部部分が見つかったのです。巨木はクリです。その後「石川の真脇遺蹟」「新潟の寺地遺蹟」「富山の古沢遺蹟」など海が近いところで似た巨木が見つかって、これらが縄文の巨木文化と呼ばれるようになったようです。それらのいくつかは港に附随した望楼のようなものと考えられています。

「こんな巨大なものが実用的な目的だけでは作れない」と森浩一氏は考えます（「基層としての木の文化」日本の古代4）。弥生時代以降、例えば出雲大社の高さなどを勘案して、信仰的な意味があったに違いないと判断しています。

イギリスにある世界遺産のストーン・ヘンジはストーン・サークルですが、それと似たウッド・サークルが「チカモリ遺蹟」で見つかっています。これは部落の中央にありました。いろいろな推論がありますが、宗教的な意味をもつとの説が有力です。また「真脇遺蹟」にも 10 本の巨木が円形に埋め込まれた跡があり、周囲で各種の装飾品、生活関連品がみつかっていて、宗教遺蹟だとされています（梅原「森の思想が人類を救う」）。

話が劈頭の巨樹信仰に返ってしまいましたが、日本人の心性にはそういうところがあるでしょう。

1・3 森と神様

(空へ)

縄文人が暮した森や生活のありさまは、大体こんなものでした。期間が1万年以上です。森と一緒に暮した縄文人のココロやアタマの働きはどうだったか、調べてみます。森の外で暮した弥生人、有史時代の人々の思考と違いがあって当然です。

小林達夫氏によると縄文人の居住地は広場でした。竪穴の家が数軒集まっていた。狩りの単位として便利なようです。自然を切り取って、彼らは人工的な空間ムラを作った。これは旧石器時代人との大きな違いです。ムラの周りは自然と人工の合わさったハラです。ハラは食料を手に入れる場所、道具を作る材料を手に入れる場所で、森が多かった。ハラの外にあるのがヤマ、ここは本当の自然であり、その上にはソラがあり神がいる。これが実態であって、彼らの宇宙観でもあると思っていいでしょう。(小林「縄文人の世界」P209)

縄文時代の住環境がハラを通してヤマと結びついていることから、森の中の暮らしという像から想像するようには暗いものではなかったでしょう。

森のあるハラは食料の供給源として、彼らの生の根源的な場所だったから、それを自然と呼ぶなら、彼らが自然を崇拝したのは想像できます。自然のあらゆるものに神を見つけるアニミズムが縄文人にあったと考えます(後藤和民「縄文人の習俗と信仰」p184、日本の古代4)。

森に神をみる考え方は安田喜憲氏もとっています。縄文時代からだけしか見つかっていない土偶、その大きな目が森にいる神の象徴と考えます。目が世界で民族の信仰対象となっている多くの事実があり、それから類推すると、縄文人は大地の神々の住み家である森、森で自分たちを見つめる神神の視線をかんじたから、土偶を象徴として作ったと考えます。(安田喜憲「森を守る文明・支配する文明」)

(空から森へ)

自然崇拜という神道を連想します。神道の発展は稲作と結びつきがちですが、学者はそうと限らない前史的なものを考えています。

2300年前より以前から大陸のモンゴロイドが稲作を日本に広めました。その中心となったのが近畿で、常緑広葉樹林があり、神道はそこを中心に発達しました。専門家の話だと、神道は二度大きく変質したそうで、古代国家の律令形成時と明治の国家神道です。園田稔氏によると、神道にも世界共通にみられる古代宗教の特色があって、それを示しているのが「用命天皇は神道を尊ばれ、仏法を信ぜられた（日本書紀）」との言葉です。外来の宗教である「仏法」に対比して、ここでは先祖が本来持っていたものを総称して「神道」という言葉で表しています（園田稔「神道の世界」）。

似たことが中国の「道教」と「仏教」との関係にもあって、中国では「道教」を「神道」と呼んでいると呼んだことがあります。だから外部からの侵入者である天孫族が作った古代国家形成以前に、在来の教え、「神道」があったとの主張は説得力があります。それが変質したのが律令以後の神道との論理です。

では神道が縄文時代どんなものだったか、園田氏の考えでは「神道は一つの民族や地域に文明が出来上がっていくときに、自分たちの神や先祖を祭るといふ、祀りを中心とした宗教だった」から、当然当時もあったし、何を祀ったかといえば「万物は生きていて、その万物の霊のおかげで自分たちの生活もあるのだ」という謙虚な生命の捉え方が先ずあって、「そういう個々の生命を疎かにせずに祀り続ける」、この習俗が神道だと園田氏はいいます。もう一つ、神道には根本に命を連続的なものとして捉えたことがあります。「生と死を一つに纏めて命とみなす。死を無とはしない」。

鎌田東二氏が「神道とは何か」で主張しているのも似ています。神道は自然の霊性を感じながら生きる、という存在感覚だから、縄文時代からあったと考えます。キリスト教などと違い、論理的ではありませんが、こういった古風な心性といったものは、その場所固有の自然風土と文化的歴史的諸条件のもとで伝承されるものだから、日本の場合、旧石器時代に端を発している、生命の記憶のようなものでしょう。

私は神道という名称をこのように定義するのは無理と思いますが、こう

いったものの存在を認めますし、大事なことと考えます。

(森の思想)

話が少し抽象的になりましたが、梅原猛氏の大要次のような論説は具体的で評価に値します(梅原猛「森の思想が人類を救う」)

縄文人の形質を最も多く残しているのはアイヌと沖縄の人たちです。彼の宗教であるアイヌの(熊送り祭り・イオマンテ)と沖縄の(イザイホーの祭り)などを深く考察し、縄文人の思考に二つの特徴を見つけます。第一の特色は生きとし生けるものは全て平等であり、同じ生命である。例えば人も熊も同じ生命であり、同じ魂を持っています。多くの生命のうち特に木の生命は全ての生命の中心です。第二の特色は死んでも必ず再生してくるという、生死循環の考え方です。死ぬと魂は肉体から離れてあの世へいく。屍は魂の脱け殻で、この世の人は魂をきちんとあの世に送らねばならないから、葬式が大切である。梅原氏の話のわかりやすくするため、具体的な例もとりあげてみます。アイヌの人の考えでは死んだ人の霊は天国へ行くけれど、直ぐには行かない。暫らくヤマに滞在する。3年、5年と経つと、霊は上に上って行く。33年でやっと神になってあの世に行く。沖縄の人の考えでは死ぬと海の彼方に行く。アイヌの人も沖縄の人もあの世はこの世と反対の世界と考えています。

このようなあの世観と前述の自然崇拝とはどんな形で結びつくのか、梅原氏の論説の中に探してみると、次の文がありました。「アイヌの文化においても、縄文の文化においても、とくに木の生命はすべての生命の中心になっているようです。日本の信仰の基本も木の崇拝であり、日本の神道の基本は生命の崇拝である。そしてすべての生命は平等であって、人間だけが尊いという考え方ではない。」

前述のストーン・サークルについて梅原氏は見解をもっていて、「真脇の柱も、ここから神が降りたり、あるいはここからイルカの霊が天に上ったりしたところにちがいないのです。」

色々な考えを読んで、考えると、縄文人は森を天と地との神の通り道と

考えていたし、霊は森に降りていたから、森で神を感じるのも不思議ではない、とまとめたくなります。少し短絡的ですが、その森に人々は生活の糧を求めて毎日入っていった、私たちの祖先は神を感じ、神に見守られて生きていたようです。

縄文人は知恵の持ち主ではありますが、変革より、神の叡智を感じとる能力に長けていたのでしょう。そして日常接する森は、主に落葉広葉樹林であり、四季の変化にとみ、それほど暗いものではなかった筈です。

我らのココロはそんなところで育ちました。

1・4 縄文人のココロ

狩猟・採集の縄文時代、農耕の弥生時代と、割り切った考え方をしがちですが、縄文時代にも照葉樹林帯では農耕があった証拠が多いので、別の見方をしたくなるのは自然です。中尾佐助氏は「照葉樹林文化」としてとらえ、世界の農耕文化の一つとして意見を唱えています（「栽培植物と農耕の起源」岩波新書）。西日本は、中心が中国雲南高地にある、「東亜半月弧」と呼ばれるこの文化の北限になる、という考えです。つまり西日本の縄文時代の一部は照葉樹林文化の一つとして発達したことになります。

縄文時代という、閉ざされた日本列島固有の文化が、異国から穴をあけられ始めた、との説と私は考えます。

農耕方式の推移が「東亜半月弧」では似た形で進行したとの考えが学説の根拠です。最初は野性採集段階、次が半栽培段階、さらに ミレットつまり雑穀を栽培する段階、そして水稻栽培の段階です。栽培が先ずイモ耕作ではじまり、イモの種類が熱帯にむいたタロイモと暖帯にむいたイモ類（ヤマノイモやサトイモなど）に分かれ、発展していった、との着想です。それぞれ量や質の欠点を補うため、前者はバナナなどと、後者はアワ、ヒエなど雑穀とともに 食べられました。雑穀は栽培しました。半栽培は縄文時代にもあったとの考えは前に述べましたから、この考えで新しいのは焼畑でのミレット（雑穀）栽培です。

佐々木高明氏は「照葉樹林文化の道」（NHKブックス）で今も行なわれている焼畑農業の実態を、雲南周辺を中心に調査、発表していますが、

有名なヤウ族の例でみますと、林を切り倒し、火を入れた跡地は三年使っています。一年目は オカボとトウモロコシ、二年目はサツマイモ、三年目はサトイモが主作物です。各々の年に一種類ではなく、同じ耕地に幾つかの作物と一緒に植えられます。例えばトウモロコシ、アワ、サツマイモがそうで、混植という手法を使っています。茶やスギ、アブラギリなどを火入れ直後に使っています。

上の例は現在行なわれている話ですが、栄養要求の強い植物から、弱い植物の順序にちゃんと植えていますから、森の時代まで含め、その土地は循環利用されています。森の時代は20年ほど続きます。

日本の縄文時代も少なくとも西日本では似た状況にあった、と佐々木さんは言っています。

ここでは人と森の関係が本質的に変わっています。森の木が貯めた栄養分を直接食べた縄文時代から、それを焼いて土に入れ、養分として植物に吸い上げさせ、それを人が食べています。これは栽培ではありませんから、数年後には土地は放棄され、森への道を辿り始めますが、採取時代とは大変違った出来事です。人工化の一つです。

現時点で照葉樹文化に近い状態の例がタイにあります。そこを調査すれば、日本の縄文時代晩期の信仰がどうなっていたか、少し客観的に理解できることになります。岩田氏のタイでの仕事では、全てに神がやどるとするアニミズムの時代から、神様の数が場所や民族によって違って、ヒトやイネなど数が減っていくのが観察できています。焼畑段階での神様というのはいずれ推定できるのではないかと、との話です。（「照葉樹林文化」）

焼畑の時代の、農耕以外の文化的な特徴といえるものに歌垣（男女が思いを歌で交わす行事）、山上他界、儀礼的狩猟（播種の前に行なう狩り）などがあります（佐々木高明「前著」）。この内、山上他界は信仰に結びつきそうです。死人を山の上に葬むり、祖先の霊はそこに長く住む、という他界観は、焼畑で暗い森の一部を除去し、視界が広がった人々に生まれて然るべき感性だと私には思えます。ヤマに霊が住むのは、梅原氏や小林氏のいう縄文人の心性で「ヤマの向こうのソラに靈魂や神はいた」と少し違います。

ヤマの尊重は他にもあります。歌垣で種蒔き前に男女が愛を歌うに似合った場所が丘だったというのも、森が切り開かれた有様と関係していると私は感じます。四季を通じて黒黒と重く茂った照葉樹は人を威圧していたのが、そこからの脱却は人に遠くを見る心を目覚めさせたのではないのでしょうか。

縄文人のココロを常緑林での森や木という観点からまとめると、こうなりましょう。

これは弥生が近づいた常緑広葉樹林の出来事です。先ず、狩りや採集の場として、森への感謝の気持ちは常に人にあったでしょう。森は感性に重くのしかかるとしても、どうしようもないものだから、人に自然との和を教えたことでしょう。ソラにいる神様はソラに届く木を通して森と往復しました。崇拜さえしたから、一本の木にさえ霊を感じました。森の重みから一部解放されはじめ、地上の遠くの山にロマンを見たと考えたらどうでしょうか。

2章 弥生時代

2・1 気象と農耕

日本の森の状況で弥生時代に起きた変化の記録があります。スギが駿河から北陸西南部にかけての帯と中国、北陸の日本海沿岸で目立ってきたことです。その西は変わらず照葉樹林、東は冷温帯落葉広葉樹林です。

弥生時代の幕開けは寒い厳しい時代でした。そのとき、今から 2300 年前、稲作中心の農耕生活に入ったのは中部から西の地方の人々でした。稲作の普及は北九州で始まり、本州の中部まで殆ど同時に進行しました。そしてそこで数百年間停滞しました。この停滞の位置は上記林相（落葉広葉樹林と常緑広葉樹林）の境目とほぼ一致しているのです。つまり稲作は常緑広葉樹林（照葉樹林帯）の中で先ず発達しましたが、そこから東へは、暫らくの間、進まなかったこととなります。

人口の話にでましたが、落葉林が暮らしやすかったのが違いを生んだわけの一つです。また照葉樹文化論が成り立てば、常緑林では焼畑が発達

して、農耕の準備が技術的に出来ていたのも別の理由になります。

暮らしやすい地球温暖期から暮らしにくい寒冷期に入ったとき、今までとれていたものが採れなくなる。すると増えていた人口をまかなえなくなり、食物獲得への新しい工夫が必要になった。当時の西日本はそんな情況に強くあったともいえそうです。似た理由が農耕そのものを生んだのだとする、学説さえあります。ユーフラテス川流域のテル・アブ・フレイラ遺蹟の研究を根拠として生まれた新農耕起源説です。12000年前に最後の氷河期が終わったのに、11000年前にヨーロッパでは又寒さがぶり返し、1000年間続きました。所謂間氷期で、その時に人類は農耕という知恵をえたという説です。

2・2 稲作の発展

稲作の最初は水が得やすい山沿いの谷口の方で多かったとの考えがあります（寺沢「弥生の農業 p 371」日本の古代4）。縄文人が山地の森林の中での採集と狩猟の生活をしていたのに対し、弥生人は多くが、水の出やすい谷底平野の、アシなどイネ科が生えやすい場所に水田を拓き、農耕を主とした生活を始めたと鈴木秀夫氏（「森林の思考・砂漠の思考」）も考えています。当然低地の其処は洪水が頻発したし、農地を広げるための森林の破壊が洪水を一層増大させたことでしょう。

遺蹟などの発掘からみると、縄文時代後期前半から晩期前半に最初の稲作が雑穀栽培の一部として、九州、島原湾や玄海灘沿岸に到達しました。陸稲が中心で、九州の山間部に到達したようです。これはそんなに普及性がなかったのは、総合的な稲作技術ではなかったからとされています（寺沢薫「稲作技術と弥生農業 p 356」、日本の古代4）。

縄文晩期後半から終末にかけては次の波及期です。これは近畿あたりまで広がりました。次の第三期が本格的な波及期で、これが新しい弥生文化の開花につながりました。

弥生時代の稲作の遺蹟は沢山あります。やや高地からやや低地へ、そして低地へと移っていきました。ただ、前に述べた山沿いの谷口のものやや高地のものはほぼ同時に発達したと見られます。傾斜地に水をためてお

くためには大変な基盤整備がいるから、努力も必要だったでしょうが、水を山からもらうとなれば、この方が楽でしょう。低地に、例えば海辺に近い位置、登呂のような場所に田圃を造ったのは弥生後期です。

一般論としては上のいった通りだと思っただいいでしょうが、そうと割り切れない話があります。最近発見された福岡の板付遺蹟では弥生時代のごく初期、或いは縄文晩期のものなのに、平野の只中で、立派な水路で水を引いて、稲作が実施されていました。（「コメ」東大出版）このことを佐々木高明氏はこう考えます。照葉樹林での調査では、焼畑から常畑へ、そして水田へと順次以降しています。ところがこの整備された水田が、板付と他の一か所だけ見つかっているのは、これがセットで、つまり稲作文化として完成された形で大陸から伝わったものだったからでしょう。セットとは栽培技術だけでなく、脱穀、貯蔵など、それに宗教儀礼までも含めての話です（佐々木「照葉樹林文化の道 p 238」）。少なくとも西日本では、照葉樹林文化が広がっていたから、その延長上にある、完成した水田稲作文化が比較的簡単に受け入れられたと、佐々木さんは考えます。

このあと菜畑遺蹟（佐賀県）が板付よりもっと古い、縄文晩期の地層からみつかって、いよいよ、稲作は弥生より古い時代に入っていたことが確かになりました（寺沢薫「稲作技術と弥生農業 p 337」、日本の古代4）。

東北地方の遺蹟で一番古いのは弥生時代前期末ぐらいのもので、水田跡は中期前半が宮城県にありました。板付の本格的な水田跡が弥生のはじめですから、思いの外違いはないのとも言えます。その約300年間で北九州から青森まで広がった事実は、縄文時代が狩猟、採集の文化として大変高い水準にあり、日本人の能力がすでに開発されていたことや、日本には植物が生えやすいという特殊な気候があったことに理由が求められそうです。

2・3 主食はコメだったか

弥生人は、森から離れてコメを作って主食にできるようになった、と普通強調されますが、私たちは、凶作という話を戦後何度も聞きました。当時そんなにコメに依存ができたか不思議に思います。庶民感覚として大事だと思うので、調べてみると、そんな反省が研究者にもあって、一体弥

生時代の主食は何だったかの考察がありました（寺沢薫「稲作技術と弥生農業 p 400」日本の古代4）。その考察によると、初期には殆ど主食にならず、中期で五割り以下、後期でやっと七割りがコメとなったようです。イネとともにやってきたアワ、ヒエ、キビなどの雑穀やムギなども主食になりました。遺蹟の数だけでいうと、ドングリ類が一位で、これにクリ、クルミ、トチを加えると、イネの二倍になってしまいます。さらにイモも食べていましたからイネへの依存は極めて低いことになります。

そうとするとこの時代もやはり森に依存していたことになります。一方水利のよいところでは弥生人は森を壊して水田にしていった。これは矛盾するように思いますが、始めは使っていなかった土地に新来者が入りこんだとした方をとる学者もいます（石野博信「縄文から弥生へ、p 234」日本の古代4）。

石野の作った例え話です。「今から 2000 年前畝傍山の山麓に前から住んでいる人の村があって、狩猟で豊かな生活をしていた。そばに沢山木が生えていたけど、少しじめじめしているところがあって、そこに新しく人がきて家を建てて住みはじめた。いやなところで、だれも住まなかった唐古というところだった。彼らはやがて、沼に種をまきはじめた。そして秋にでた草の先をつまんで、干して白いコメをとった。先住民はやがてこれがおいしいのを知った。」

こんなお話を学者が作っているから、縄文人が崇拜していた森を渡来者が伐採するというような、今の土木工事のような手荒な開発はなかったでしょう。それでも相当な量の森が平野部の周辺で破壊されたに違いありません。

2・4 森と農耕

（森の養分収奪）

上の話を少し深く考えると、弥生時代となって森林に対する考え方が少し変わったのがわかります。それは森林の土地は共有だったのに、土地が個人のものになり始めたということです。

畑を造るには木を切り倒さねばならなかった。焼畑は木が大地に貯めた

栄養分をもらうのが主なねらいでした。その土地に栄養分がなくなれば人々は移動した。そして土地に木が養分を集積してくれるのを待ったわけです。木は貧栄養の土地でも生えるからです。ここでは森は人々の共有です。

ところが水田の場合、土地という空間が必要になった。つまり土地は人のための水田専用で、木の生える場所ではなくなりました。ここが森とヒトの関係で弥生時代が大変に新しいと私は思います。

(鉄と木炭)

稲作が始まったのは前 300 年頃とされています。稲作が始まるとまもなく青銅や鉄の道具が使われ始めます。これらは当初大陸から持ち込まれたものでしたが、紀元後 200 年頃には国産品が現われます。つまりこの頃国内で炭を使った鉄の精錬が始まったことになります。

鉄生産のために炭が沢山いることは、森の破壊の面では歴史上の大事件です。柱や板になる太い木は使わないけれど、細い木を大量に使います。日本の製鉄はタタラの名で知られています。タタラは風を送るフィゴのことです。砂鉄と木炭とを混ぜこれに風を送って 3 日 3 晩燃やすと、炉の底に鉄塊がたまり、これを鍛冶屋でまた木炭と焼いて鋼鉄を造ります。一つの製鉄炉（3 x 0、7 x 1 メートル）で 300 貫（1 トン強）の木が必要だったといえます（市川健夫「森と木のある生活」）。

でも弥生時代には鉄器が農具に使われたかどうか、湿地帯以外を開墾すると鉄農具がいりますが、当時は殆ど使われなかったと考えてよいようです。重い土を掘り起こして水田にする農業はこの時期には少なかったと考えられます。、農具に使う堅いカシなどを削るのに鉄器は大事だった程度でしょう（「コメ」前書）。鉄を作るための森林破壊、田を作るための森林破壊はそれほどには進まなかったのではないですか。（寺沢薫「稲作技術と弥生の農業、p 383」日本の古代 4）

(木の利用)

しかし思わぬところで木を使っています。静岡の登呂遺跡はその頃のも

ので、詳しい話がわかっています。東日本で最初に発見された農耕地の遺蹟で、紀元 200 年頃のできごとですが、住居のほか、田に水を引くための溝の側壁に大量のスギ板が使われています。概算ですと約 2 万石の丸太が住居に使われ、約 3 千石の丸太が溝の板となっています。板作りはスギの簡単に割れる性質が使われますから、立派なスギがいます。遠くからも運ばれました。（「日本の森と木と人の歴史」林業調査会）

登呂の遺蹟のわりと近くに古代林の遺蹟が見つかっています。スギ、シラカシ、イヌガヤ、エノキ、クスノキなどの樹林がみつきり、スギが特に多く、樹令 60 年くらい、直径 90 センチのものもあったといえますから、登呂のムラを構築するのに使ったかもしれません（大野初重「東日本の集落と祭祀 p 311」、日本の古代 4）。

登呂から少し離れていますが、天龍川は今も勝れたスギの産地です。そんなところでの森の破壊が農業を支えたかも知れません。

2・5 森林信仰と農業

以上のような事柄から思うと、この 600 年間に森は破壊されたとはいえ、人は森と暮らしているという実感はあったと考えます。多くの田は身近の森からの水に依存していたから、森から遠く離れた生活にはならなかった筈です。

森の破壊が洪水を生んだとの記載は弥生時代後期（100～300 年）に見られます。

（木の霊と農作）

弥生人の森との関わりで調べると興味がある話が幾つかあります。金田久樟「森の神々と民俗」から例をとります。一つは森からとった桂の木を田植え前の田の片隅に植えるという行事です。

彦根の傍にある多賀大社の話ですが、この神社は国生みの神話にあるイザナギと関係する程古いのですが、そこでヤマにある桂三本からとった枝を田植え前に差して豊作を祈ります。似たことが滋賀の朽木村でもあり、広田神社の神木のスギの枝をきり、半紙に包んで水引でゆわえ、イネの種を播くときに苗代の水口にさして豊作を祈ります。

西洋での似た話が文化人類学で知られています。「枝または木は、一般的に生育の精霊と考えられている樹木の精霊を表し、植物を生かしてみのらせる力を、こうして特に麦の上に与える」。麦は日本の話ではイネです。つまり日本の例も樹木の霊を信じた古代人の心を写しだした話ととれます。イネの生育に森の力を借りたこととなります。

物質的な根拠のある、似た話もあります。それは同じ金田氏の本に出ているシバの精霊です。坪井洋文氏の論として紹介されていますが、「水田稲作の技術の一つとして、春に山から若木の枝や草を刈り取ってきて、水田の土の中に埋め込む作業がある。この刈敷きは肥培技術の一つとみられるが、それだけではなく、山の守護霊を畑や田に移すための再生儀式でもある。」

刈敷き話を前の桂の話と重ね合わせると、古代日本人が森に抱いていた畏敬が、ある程度の物質的根拠をもちつつ、田に移されているという、極めて納得のいく話になります。収穫を神に祈るという普通の信仰より、次元の高い話だと私は思います。

(龍と巨木)

蛇は森の象徴で、森の主と言える程、多数住む蛇への信仰は縄文時代にもありました。これは縄文土器にも現われていました。外国にも蛇信仰は多くあります（安田喜憲「前記書、p 59」）。

弥生時代になると、龍に似た、耳の生えた蛇が現われます。また土器に龍が書かれるようになります。龍の登場は弥生人にとって大事な意味がありそうです。（金田久璋「森の神々と民俗」 p 168）。蛇信仰の土壌があった日本に稲作の導入とともに、「龍」が中国から入ってきました。

各地の龍神伝説で龍は巨木と結びついています。何故かという説明を金田氏はしていますが、中国にある「世界の中心にそびえたつ高山」という考えを引き合いに出しています。この考えが日本に入り、変形して山が巨木に変わったと理解しています。欧州での宇宙を支える宇宙樹という伝説と似ている、との紹介もありました。

龍が巨木を守る話は今日本各地にあります。つまり弥生人は森を巨樹に

置き換え、龍をそえて信仰の対象としました。これがどんな願いにつながるのか、舞鶴市周辺の龍蛇退治の伝承を金田氏（上記書、P152）は検討して治水を取り上げています。退治された大蛇は、頭、胴体、尾に分断され雨ごいに靈験のある神社の祭神（水神）として祭られる。この地域は池内川、与保呂川、高野川があって、これらの狂暴性を発揮するのが竜神だから、退治して神として祭り、霊を慰めた、と考えています。

2・6 弥生人ココロ

田に木を刺す話、竜神の霊を慰める話は、この弥生時代で発生した事件に対する信仰上の対応です。弥生人のココロは森から直接の影響を受けなくなりました。でも豊作の神の住み家として、洪水として源として、森を新たに意識しました。縄文人にとっての恵みの森は弥生人ではココロを圧迫し始めたようです。オソレという気持ちでしょうか。

3章 古墳時代

3・1 聖なる森の喪失

（時代区分）

時代区分は住んでいた当時の人にはわかるかと、何時も気になります。縄文から弥生へ、これだって稲作が入ってきたこと以外、実感として生活が変わったとは思えないでしょう。それが大変な事件だったのは後の人々が気がついたことです。

縄文時代の特徴だった土偶という土人形が弥生時代には作られなくなったのも結果としてそうであったと今思うことでしょう。文明の本質が変わったこととの関連はその時代の人にはわからなかったと思います。弥生という時代はコメをつくるようになった、という大変大きな特色がありますが、それでも一つの新しい時代区分が始まったという実感は今だからわかるのでしょう。

古墳時代は、山のような大きな墓をつくった、という特色のある時代ですが、それが前の時代や後の時代を比べたとき、その時代の特色だと言えるほどに意味があるか、これは弥生時代よりもっとわかりにくい時代

区分です。弥生 600 年、古墳 300 年を、合わせて 900 年としちゃってもいいのではないかとさえ思います。

学術上の判断でしょうが、常識的な感覚で前の時代と違いがわかるのは自然の私有化が一層進んで、お墓の場所を囲い込んで、それ以外の用途に使わせなくなったことくらいです。

弥生時代に水田を作ったときも、今までの食料基地は森で、森の機能の一部が食料供給だったのに、水田はコメ供給の専用地となった。専有のため弥生人は水田の周囲に水を引くため溝を掘ったり、住居を含む土地全体を溝で包む環濠集落（これは近隣の争い対策）を作ったりしました。これは縄文人にはない感覚です。占拠する気持ちがだんだん強まる。その延長に死んでからの領地、墓の占有地とでもいう、巨大な古墳があるというのは理解ができます。つまりあの世にいてもこの世の場所を囲い込んでおきたいという欲望です。これは前の弥生人とは違う心の働きです。

（森と人の関係の変化）

自然と人との関係、つまり古墳時代の人は森との関係が弥生人と違ったか、それなら古墳と弥生を分けるのも、この本では意味があります。検証してみます。

古墳人が水田拡充のため一層森を破壊したのは確かにしても、それは時代を区分するほどの出来事ではないと考えます。次の話は区分の必要を少し感じさせる出来事です。

弥生時代の中期と後期に大きな騒乱があった、という証拠があります。可耕地の拡大のため、土地と水の争いでした。弥生では原則として低地に人が住んでいたのに弥生中期の騒乱で人は新しい土地を求め、高地に住むようになった。そして後期には倭国騒乱と呼ばれる大騒乱があって、強大な権力が誕生した。彼らが次の古墳文化を生んだ、と理解してよいようです（森浩一「ヤマト古墳文化の成立 p 256」日本の古代 5）。

権力が確立していなかった弥生時代が一度騒乱に陥り、新たに権力者が登場した、それが古墳時代の始まりとする見方です。

付随して山と人との関係に変化が起きます。縄文時代や弥生前期には山

は畏敬の対象だったのに、中期には戦乱を避けてそこへ人が逃げ込むことになったのは前に書きました。これが森と人との関係を考える上で重要な事件だったと考えます。古墳時代になると、再び人は平地へもどるのですが、その時には山の神聖さは気持ちの上で失われています。だから山へ死者を葬るのにも、大きな抵抗がなくなった。このことの証拠は丘の一部に墓らしいもの作った、いわゆる古墳が見つかることがあります（森浩一「巨大古墳出現への力 p 93」日本の古代4）。

簡単にいうと、山の神聖さを一部失ったのは古墳人のころの特色でしょう。弥生中期までは山は資源でしたから、日頃そこにかけてに入ることなく、ある取り決めがあったようです。それが騒乱のため、止むを得ず山へ逃げ込んだ、と理解していいようです。（森浩一「巨大古墳出現への力 p 86」日本の古代5）

それにもう一つ山との関係の大きな変化が起きました。水田の位置が森とは関係なくなったことです。

水田が、弥生前期には谷間のやや低地、いわば森の近くの谷口にあったのが、弥生中期前後から、谷口からはなれた、やや傾斜地の高地にも発達し、それが縄文後期からは平地が多いの低地にも作られるようになった。

これは道具の発達と関係があります。

弥生時代から進んでいた道具や生産方式改良の工夫が古墳時代に入ってから実ってきました。そのなかで農具が鉄器化したのは五世紀（古墳中期）になってからです。この見地からみると、水田は弥生時代の前期に水はけの悪い「湿田」で始まり、弥生中期から後期には排水が不完全な或いは少しよい「半湿田」で行なわれた。それが古墳時代の前期の終わりには灌漑用水を引いて地下水位の低い排水のいい「乾田」でも行なわれるようになった、という事実がわかります。

勿論後の時代のもの程生産性がいいのは言うまでもありません。（寺沢薫「稲作技術と弥生の農業 p 375、360」日本の古代4）

乾いた土地を掘り起こすには鉄の道具がいります。

こうして人と森との関係が希薄になっていった、それが古墳時代の特色としたら、弥生同様コメ作りの時代だったとしても前者を後者から区別する

理由が「森と人との関係」でもあることになります。

(人口の爆発)

300年から600年までの古墳時代、人々の暮らしでは稲作農業が定着して、人口が増えました。前述した小山氏による遺跡数からの推定だと、縄文時代が78000人、弥生時代が60万人と凡そみなせるのに、古墳時代(土器時代)には540万人にもなります。これでも少ないと考える人もいます。弥生と縄文で8倍、古墳と弥生では9倍です。これが500年間に起きた人口変動で、0.4%にもなります。紀元0年から1600年までの世界での平均は0.04%ですから、以上です。(埴原和夫「骨から古代人を推理する」日本の古代5)

これらの増加は経済発展に負う単純増加だけで説明するには余りにもおおく、渡来人の増加を考えると、埴原氏の仮説にたてば、それは260万人ですが、これも余りにも多い感じがします。従来少数で、技術者だけのようには言われていましたから。

埴原氏によると、上田正昭氏の考えでは、渡来人の波は4つあり、第一は前200年頃、第二は400年頃、第三は500年前後、第四は600年代の後半で、後者はほぼ古墳時代の増加とみなせるようです。

モンゴロイドではあるが、違った人々が共存し始めた。その過程が古墳時代とすれば、この期間を弥生とも律令とも分けて、古墳と区分するのにも納得できます。

この時代以降、森の恩恵を受けずに過ごした人が人口の半分近くになった可能性もある、というのは、森と人との関係からみると、重大です。

古墳時代こそ「聖なる森の喪失の時代」です。

3・2 人の暮らし

(技術開発)

550~75年に榛名山が大爆発して幾つもの遺蹟ができましたが、そこから人々の暮らしをみると、300年までの弥生の生活とは大変に違ってきます。普通の家でも、地面に石の基盤がない掘立柱の建物が住居に使われて

います。前の時代には倉にしか使われていません。

竪穴住居としては100平方メートルにも及ぶ大きな家が多くあったようです。豪族の遺蹟とみられる榛名山麓三つ寺遺蹟では、住まいと祭祀場とが分離していて、両者を取り囲むように濠が掘られています。これは豪族の家のためとみられ、弥生時代の環濠とは違っています。そこでは水に強い靈性を感じ、祭っていました（辰巳和弘「古墳時代の社会と生活 p 390」日本の古代5）。

人口増は幾つかの大きな技術開発が起きたせいです。根本的な事は鉄の利用です。鉄器の国内生産開始は弥生時代の後期とされています。しかし本格的になったのは古墳時代前期です。農具特にスキ、鋸、手斧などが作られ、森林の伐採や木材の加工が楽になりました。

掘立て柱の柱は竪穴住宅時代の支柱より数が沢山あります。木を縦に割るのは楽ですが、横に切断するのは力のある古代人にだって難しい仕事で、斧では効率が悪い。鋸があつて初めて気軽に出来ます。

稲藁の利用は日本の文化でいつも重要な意味をもちます。現代でも、先日まで藁は畳の芯や、粗壁の繊維、家畜の敷き料など到るところで多量に使われていました。藁も利用には稲を根から切り取るのに便利な小型軽量の刈鎌がありますが、弥生時代の終末以後になると、遺蹟にでてきます。このことも古墳時代に入ってから稲作や生活全般のあり様に大きな変化を起こしたでしょう。（上記書 p 383）

稲作と木材生産の両方に関係する技術が当時のダム建設に見られます。愛媛県の古照遺蹟で、石手川の分流を堰き止め、水を水田へ導入した大きな堰が作られた跡がみつかりました。古墳時代です。第一堰は13、2メートルで約550本、第二堰は23、8メートルで約650本の広葉樹丸太を斜めに差し込み、全体は長い横木でささえられていて、隙間には粘土やオギが詰め込まれていました。

（森の破壊）

水田が山の裾野にむかって拡張され、森は潰され、そこから木材や薪炭材が出ただけでなく、水田作成と無関係にも森が壊されました。鋤床が発

見され、鉄器生産のために必要な高温を炭を焼いてえました。

人が増えたため、この頃瀬戸内海沿岸で製塩が盛んになりました。薪が
いります。

技術の対象は森林資源でしたから、森林の破壊が大規模になったのが古
墳時代の特色です。

森が聖なる領域でなくなったことと関係があるかもしれませんが、とも
かくこの時代の森がかなり厳しい状況にあった証拠が遺蹟からわかりま
す。コナラ、クリ、クヌギ、ハンノキなど落葉広葉樹が建築用材に使われ
ていますし、この時代の土層の花粉分析をすると、これらが優勢樹として
はいつています。このような木は二次林で、本来その地にあったものではな
いことがわかっており、森林破壊の結果生まれたものです。だから生活圏
で森林破壊が進んでいたことがわかります。(古墳時代の社会と生活 p 400、
日本の古代 5)

炭の樹種を調べた研究でも森の破壊の進みかたがわかっています。炭は
身近な木を使うのが原則ですから、当時の樹種の指標になります。大阪の
炭窯 8 箇所ですが、5 世紀までは広葉樹が 9 割り、それが 7 世紀
に入るとアカマツが 5 割りをこえます。つまり、5～7 世紀の古墳時代に
森林が破壊され、二次林のマツが主流になったわけです。(「日本の森と木
と人の歴史」)

この時代の森はどんな状態だったか、先ず森の木の種類が変わり始めた
ことを話さなければなりません。それは古墳時代後期の始めの 500 年頃、
気象は温暖化に向かい、以後ほぼ今と同じ種類の木が日本全体に分布しま
した。つまり照葉樹林は山岳地帯では中部まで、その北は落葉広葉樹林(ブ
ナ、ナラ、トチなど)で、北海道も西部はそうです。東部は亜寒帯針葉樹
林ですが、海岸部では関東北部、新潟周辺までカシ、シイ、タブが生えま
す。

3・3 古墳と信仰

権力を手に入れた人間が立派な墓を作る、という話は今の人にもわから
ない感覚ではありません。調べて驚くのですが、死生観の表れとして、中

国では薄葬と厚葬の二つの対立する考え

方が交互に表われています。日本の弥生時代に平行していた中国の秦、前漢、後漢は概ね厚葬、その後の魏（ギ）は徹底した薄葬、古墳時代に平行していた西晋も薄葬、南朝でも薄葬、北朝では北魏になって厚葬です。

弥生時代の後期には戦乱が納まって高地で住む必要がなくなった。そこは思い出の地、そんな所に先ずお墓を作るということが起こったのは前に述べました。この山は人工的な部分が少なく、古墳と呼べるものではありませんが、立派なお墓になったようです。似たものを平地に作ろうと思っても不思議ではないでしょう。

これも中国からの輸入思想のようです。この頃は中国との交流も始まっていますから、250～300年には日本（耶馬台国）の代表が洛陽へ行って、丘陵地帯の大きな古墳をみているはずですが、それは当時（魏の時代）の考えとは違った前漢、後漢の作品だったのですが、それを見て帰国したのでしょう。（森浩一「古墳とは何か、p21」日本の古代5）

今でもその気がありますが、日本の輸入品はいつも一つ遅れた思想（流行）をもって登場します。葬儀も同じと考えれば当然でしょう。日本に薄葬が流行するのは大化の改新の時代です。

お墓の話は少しココロの問題とつながります。魏の文帝の理想に「自然の山林に葬ったため、やがて墓が山や林と一体になり、代が変わったときどこが墓か分からなくなる、これが理想だ」としています。日本人が好む自然観だと思います。（上記書、p29）

古墳は厚葬ですが、この場合、コウヤマキ、ヒノキ、カヤなどが棺桶として使われました。コウヤマキという最も腐りにくい木の棺に入れられた人はもっとも偉い人だったようなのは、まことに魏の文帝の話と反しています。

3・4 森と神様

森の神様の話を続けて来ましたが、古墳人となると、事情は複雑になります。森の時代を経験しない、外来の日本人の数が増えるからでしょう。日本人は先に縄文人の祖先の原モンゴロイドが住んでいました。彼らと祖

先は同じでもウルム氷河紀に北アジアで極寒に耐え、遺伝的に違ってしまったのが北方モンゴロイドで、弥生時代以降日本に来ました。この二つが日本人というのは大筋では認められている考え方です。

今の地球の人種問題を考えると、古墳の日本で人種問題が起きなかったとは到底思えません。両者の交配がかなり起こったのは確かとしても、原モンゴロイドも半分以上、古墳時代にはいたはずで、だから古墳人の神様観は、二つの角度から調べる必要があります。一つは稲作儀礼が神道と結びつく以前の外来者の神様、もう一つは先住の縄文人の中心だったらしい、出雲の神様です。

森から田へ依存する生活になっても、全てが簡単に変わる筈もないから、縄文的な生活を送る人が古墳時代にもいた筈で、彼らは独特なココロの働きをしていた筈です。しかしそれらしい像が歴史の本からは浮かんできません。

(神道の始まり)

外来系のモンゴロイドは以後の政権の中枢に座るから、今からでも当時の状況を推察できないわけでもありません。

今も日本の中心にある神道がそれです。神道は中国語の shin-tao (神の道) からきた言葉で、元来農耕儀礼でした。言葉は、伝来した仏教から区別するため8世紀に使い始めたといいます。自然の力である神にたいして、慈悲深い振る舞いと保護を請うことを意図したものです。農耕儀礼としても出発時には在来のものを取り纏めた筈です。(大貫恵美子「コメの人類学」 p84)

それでは古代国家が始まったときに起こった儀礼はどうだったのか、調べます。神道の儀礼は禁欲・奉納・祈祷・浄化からなり、浄化は今も神道の中心思想と思われている禊(ミソギ)とお祓い(オハライ)です。神社の入り口で手を洗い、口をすすぐのが禊です。お祓いは、結婚式や地鎮祭のときなど神主が御幣を左右にはらう、あれです。これがいつも神主つまり神社との関係で我々の生活に入ってきます。この禊とお祓いは神道独自

なものです、有史前の神道には見られません。宮廷儀式に取り入れられたのは天武天皇（?～686年、）で、法令となるのは大宝律令（701年発令）が初めてのことです。この時期は古代国家建設にともなう森林破壊の最盛期（600～850年）でした。これが神道の独自で且つ中心思想となる浄化の思想です。（ひろさちや「仏教と神道」新潮選書）

（神道以前）

六世紀に仏教が入ってきて、こんな儀礼が始まったとすると、それ以前の儀礼はどうだったか、神道学者はこう考えます。

神道は日本人が自然にもっていたもので、無意識的、習俗的だったから、儀式などなく「祭り」だけだったといえます。「祭り」は何処かに神様がいてそれを祭るのですから、六世紀以前に何を祭ったかが問題です。

ところで古い神道では、神社に建物はなく、「森」が神社そのものだったそうで、今もそんな神社があります。社殿が建設され、ご神体をご本殿の中に納められたのは、仏教寺院の建築や仏像崇拜の影響があるといわれています。

森を「祭る」とは、人が森に全面的に依存して暮らした、ということの別の言い表しとみます。でも崇敬の対象となった森は、西日本では昼なお暗い常緑広葉樹林だったことを思うと、今様の「自然崇拜」的な事柄だけが「祭り」のわけだったか、少し疑問です。

崇拜した森が限られたものだったという説明はあります。神社本庁の出している「神社とみどり」によると、神殿のない時代、人々が拝んだ例として、ヒモロギという神霊のこもる木、イハサカという神の御座、カンナビ山やミモロ山という神が降りてこられる山があげられていて、これらを取り巻く森こそ、信仰の対象だったとしています。

（竈の神）

古墳時代固有の、信仰と絡んだ遺蹟などないかみますと、竈の遺蹟という、この時代に始まった祭祀の跡が見つかっています。同じ竈の飯を食う、という言葉は今も使われていますが、関東の遺蹟や福岡などから竈に神が

宿るという考えを具体化したような遺品が見つかっています。稲作全体の祭祀は当時はその土地の首長が行っていたのがわかる遺蹟もあります。

(辰巳和弘「古墳時代の社会と生活、p 407」日本の古代5)

祭祀が日常化した話ととらえられそうです。一つ竈での共食と豊作の祈願が日常的に神を感じるどころでした。前述のように騒乱で高地に人が住むことになり、森の神聖さが消えた、また森への依存度も減った、そんな中で日常的な場所への神の降臨をねがった。そうっていいかもしれません。

Ⅱ部 生命記憶・森の思想

日本人と森との関係が縄文、弥生、古墳と時代が下がるにつれて希薄になってきたのはⅠ部でみました。「Ⅰ部 古代の森」では、森とその時代の人の暮らしやココロの働きを並べてみました。これらの間には関係がありそうでした。

環境がココロの働きに影響与えるのは私には納得できますが、それが遺伝するかとなると、疑問です。

「Ⅱ部 生命記憶」では違った角度から、環境とココロの働きとの間の関係を考えます。そして遺伝するらしい、との自然科学者の意見を紹介し、更に私見を発展させます。

1章 森の思想（鈴木秀夫氏の説）

地理学は人文科学と自然科学の間にあります。環境と人の思考の関連について、研究者鈴木秀夫氏の意見はなかなか面白いものです。

1、1 前線の移動

「森林」の意味をわかりやすくするのに、鈴木氏は反対語に「砂漠」を選びます。砂漠はヒトが森林を破壊したときに生まれるように言われます。確かに雨の少ない地方で、修復が短期、例えば千年では気象的に不可能のような場合には砂漠が誕生します。でも地球での多くの砂漠は、降雨量、風、日射などのせい生まれ、ヒトの力ではどうにもならないようです。つまり砂漠は予め存在するものです。

雨がふるわけはなかなか分かりにくい話ですが、前線帯が必要というこ

とを自明として進めます。つまり梅雨前線のように、寒帯気団と熱帯気団がぶつかり発生する、あの前線です。地球上に発生する前線の数は大きく見ると数本です。これが北へいたり、南へいたりしますから、季節によって、日によって雨が降ります。ところが前線が行かない土地があります。そこは雨が降らないから砂漠ができます。北アフリカ、南西アフリカ、中央オーストラリア、南西アメリカの砂漠などはその代表です。

前線帯では空気中の水蒸気が蒸発して凝結すると雨になるから、もし風が吹いて、山にあたるなどして、雨として落ちてしまうと、その風下では雨が少なくなる。そんな理由で、乾燥地が出来ます。中央アジアに砂漠のようなどころがあるのはそのせいです。前線が雨を降らすのに大事な因子です。砂漠が出来てしまうのに大事な因子です。ところが前線は一つところに居座るわけではないのは、日本の梅雨戦線からもわかります。また、年によって位置が変わるのも、空梅雨などの言葉から日本でも経験できます。概していうと砂漠はヨーロッパには多く、東洋は森林に蔽われている地域が多い、こういった区分けで、鈴木氏は著書「森林の思考・砂漠の思考」で論を進めます。「ヨーロッパ人の多くは砂漠に住んでおり、彼らのココロの在り方に砂漠の民の考え方といえる特徴がある。一方東洋人には森の民の著しい特徴がある」。これが何千年もそんな環境で暮らしてきた結果だと鈴木氏は言います。

1・2 砂漠の思想

人の精神の在り方はその人がどんな神様を信じるかで、かなりわかる、そう言われてみれば当然です。ヒトはホモ・サピエンスという一つの種族なのに、多数の宗教があるのはご存じの通りです。少し漫画的な省略の仕方でお話を進めますから、信心深い方には失礼ですが、クールに見るとこうなるということでお許し下さい。

ヒトにとって何が大事か、当然食物です。それが植物から始まるのはご存じの通りです。牧畜だって、植物を食べる動物が先ずいなければならぬし、狩猟といったって 対象の肉食動物の食べ物は植物を食です。ごく僅かですが、海からの回遊魚が食物という例があるけれど、それは海と

いう今の話題から外れた世界です。だから植物が生えている場所ではなくてはヒトは生きられないといえます。

植物が生えるには大地と太陽だけでなく、水がなくてはいけない。そこで水がどこからくるかが、ヒトの関心事になります。

エジプト人はナイル川の縁で暮らしていたから、川水の安定を願い、先ず神を川に見つけました。やがて川を支配する太陽に神を見つけました。こんなエジプトでは、年に一度は雨があって、水位を高めて氾濫を起こしました。氾濫が土を豊にしたのです。当然 太陽と氾濫の時期が彼らの関心事でした。

ところで彼らの精神の在り方はここで止まってしまったのです。次のイスラエル人ほどにはなりません。

さてイスラエルでは環境が違いました。もっと厳しい状況にありました。イスラエルの民はサワラ砂漠の周辺の僅かな土地で、しかも他の農耕民族の土地の縁でロバを元手に暮らしていました。ロバの乳を農作物と交換して暮らしていたのです。だからロバの餌となる草が大事です。草が生えるためには降雨が必要です。彼らは草と降雨の関係を知っていました。しかし不幸なことにイスラエルは気象上、天候が不安定な位置にあったのです。

前線を刺激して雨を降らせるという言葉は天気予報でよく聞きます。イスラエルは雨を呼ぶ前線の端にあったのです。前線の移動の地理的な上下が年により変わり、嵐がきたりこなかったりしました。そんなことから雨を呼ぶ嵐の到来を願う、「嵐の神ヤハウエ（エホバ）」をイスラエル人は頼りました。

気象前線の移動を気ままに起こす「嵐の神様」は、エジプトの太陽神より、強くヒトを左右したのは当然でしょう。気ままな美人に人気が集まるのは、男性なら経験することです。そんな神様を強く引き止めたいという強い願いはが砂漠の縁に住むイスラエル人に勿論ありました。だからユダヤ教にしる、キリスト教にしる、「貴女だけが全てです」と告白するようになり、唯一つの神「エホバ」を信じる一神教が生まれました。エホバの神は正に絶対神であるわけがここにあります。

それに彼らは砂漠をラクダで旅するのが生業でした。砂漠の中で迷った

ら決断が生死を決めます。誤れば死、これは神の御心と考えざるをえません。こうして自分を越えるもの、自分を生み出したものを唯一の神と考える傾向が強まったことでしょう。砂漠という環境に住んだ民は他の神の存在を認めず、排除する一神教であったのは、キリスト教ユダヤ教、イスラム教共通です。

1・3 森林の思想

仏教を生んだインドのアーリア人の場合は大分違います。先住民であるトラヴィダ人は焼畑で農耕をしていましたが、乾燥のため農耕を放棄しました。その後に入ったアーリア人は遊牧の騎馬民族でしたが、彼らはやがてインダス川の川べりの僅かな地で農耕の定住生活を始めました。住みにくいところに入った彼らは当初から問題を抱えており、当然森林を焼き払い、農地にします。焼くために必要な「火」を崇拜し、神としました。

彼らが住んでいたところは焼き畑の跡、いわば周囲を森に囲まれた、森のさけ目です。乾燥化が一層すすみ、焼きつける太陽のせいで、水が減り、植物が育たなくなりました。太陽神の登場です。これはエジプトの太陽神と似ていますが、エジプト神と違って太陽は川の水を調節してはくれません。いぼっているだけです。でも太陽神はその乾燥化を押さえる役として主神となりました。一方彼らは雨をもたらすモンスーンの神も太陽神と並んで信じました。

さてインド人にはもう一つ大事な違いがあります。彼らは水が欲しかったのですが、水を神様にするのはためらいました。イスラエルのように予期しないことを起こす嵐の神のようなものに頼らなかったのです。彼らが哲学的な人種だったのでしょうか、それとも周囲に残された森に入って考えるというトラヴィダ人の習慣を真似ていたせいでしょうか。宇宙にみちている、何かを生ぜしめるもの（生ずるものに「水」も入るのですが）、それを信仰の対象としました。これをブラフマンと呼んで、「梵」と言う字で示しました。

どうして彼らがこんな抽象的な考えに辿りつけたか。森が大事な役を果たしていたと鈴木氏は考えます。森にはとても沢山の生物がいます。

だからそこでブラフマンを感じるのは自然だという考えには私も同感します。

人里離れた森に入って思索し、彼らは更に新しい観念を見つけました。確かなものは、自分、「我」です。別の言葉では「呼吸するもの」です。これをアートマンと呼びました。「梵」と「我」とが一体になること、これを真理と考えました。仏教の発生です。梵我には砂漠的傾向の一神教も感じられますが、考え方が極めて森林的な曖昧さももっています。

森林には曖昧さがあるってわかりますか。例えば道に迷ったときの判断の例を引きますと、前にあげた砂漠の中と森林の中とでは違いがはっきりします。どうしてか、砂漠とは違って、森で道を間違えたって平気だからです。食物は森ではどこにもあります。間違っただけ前より良いところ行ける可能性だってあります。桃源郷などという伝説があるというのは、そんなことを暗示していきましょう。だから森では曖昧だっていいのです。

仏教のような抽象的な思考はやはり森林というものの存在抜きではとうていありえないと考えるのは説得力があります。

日本人の思想が森林的であるのは、伝統的な神道だけでなく、外来の大宗教、仏教の教えの中にも日本では一層森林的なものが入り込んでいるという考えはⅢ部で紹介しますが「梅原猛「森林の思想が地球を救う」、鈴木氏の指摘では一万年続いた森林での生活がその後日本で発達した砂漠的な文化への2000年間の傾倒でも消し切れていないとのこと。

378年「論語」が日本に紹介され、「天」と云う言葉を日本人は初めてしりました。これは「人事を尽くして天名を待つ」という言葉でわかるように、絶対的なあるもの、つまり砂漠的一神教の言葉です。また538年伝来した仏教は「如来」という一神教的な言葉を教えてくれました。仏教は森林的ではあるが、砂漠的側面ももちます。仏教の内容として「浄土」といった「天国」に近い教えが広まり、徐々に砂漠化していった側面もあります。しかしこれは日本の指導的宗教家の思想の変遷であって、教えとして聞くものの一般民衆は森林的呪術世界にいたのが、現実だと鈴木氏はいいます。明治以後のキリスト教の布教の影響をみても明らかで、熱烈な布教活動にもかかわらず、キリスト教信者は日本人口の1%にも満ちてい

ません。このことは韓国で5、6%であり、且つ一神教の天道教2、2%がこれに加わるので、日本の一神教信者が大変少数なのわかります。

このように見ると、神様、つまり精神の在り方が、住む環境に強く左右されているのが納得したくなります。勿論、純粹に砂漠的とか森林的とかすっぱりとは割り切れませんが、その後の森林国日本での発展をみると、鈴木氏の指摘には説得力があります。Ⅱ部では大昔の影響が今も続くとの考えの正否を自然科学的に考察してみます。

2章 生命の記憶

住んでいた環境が人の思想に強く影響を与えたのは、鈴木氏などの思想の解析で、可成納得できました。思想はアタマの働きですが、アタマで組み上げられる前に、組立作業を揺り動かすココロの働きも無視できない、環境とそこで生まれる思想の関係を私はそう理解します。つまり地理的な環境の影響をアタマだけが受けて思想ができたのではなく、影響をココロも受けたと私は考えます。アタマとココロの言葉の使い方は2章の後半で説明します。

一万年以上も森に全面的に依存した生活を続け、しかも高度な文化生活を送っていたとすると、日本人の場合は森の影響が強いという理屈になるでしょう。縄文時代だけでなく、Ⅰ部での考察だと、弥生時代600年、古墳時代300年もその余波のなかにいたことになります。

一方、体質的な次元でのもので縄文、弥生、古墳を経過するうちに日本人を形づくり、それが遺伝させするものがないだろうか、この章での考察の焦点はそこです。もしあったとすれば、当時の森の影響は2000年たった今も、私たちの体内にある筈です。ここがこの著作の眼目です。古墳時代と現代では、山の森の国土に占める割合は変わりません。三分の二が森です。でも都市での暮らしは森を人々に忘れさせました。だから長く森から受けた影響は今の我々には消えていると考えたくなります。しかし1章で鈴木氏は一神教が日本に広がりにくいことに森の影響を見えています。でも今の自然科学は環境の影響で遺伝子が変化することを認めません。だか

らこれからの考察は非自然科学的ですが、そうではあっても自然科学の装いを維持しながら、2000 年間では森の影響が消えないという考え方を説明するつもりです。

2・1 動物の体に残る進化の痕跡（三木茂夫へのオマージュ）

動物も植物も進化するという議論は殆ど疑いないもののように、多くの人は思っています。サルから猿人が分かれ、猿人からヒトが分かれたのは一つの例です。ここでの話題は、これらとは少し違い、もっと部分的な話です。進化の過程で、体の中の器官、例えば胃や腸がどんなに変化していたかというレベルで。比較解剖学の方法に基づいた話です。第一の話は、ヒトの体が、動物としての進化の痕跡をもっているという証拠です。人間にある尻尾の跡など日常の話題になることもあります、もっと深い側面を取り上げます。

ヒト（ホモ属）は 250 万年前ころに猿人（アウストリアピカテス属）から分かれました。猿人は 480 万年前ごろ、類人猿（ゴリラ、チンパンジーとして馴染み）から分かれた。その前は 1500 万年前ころ猿から霊長類として分かれた、今の学問ではそういうことになっています。これらは哺乳類と総称されていますが、哺乳類の前は 恐竜の仲間の 爬虫類、その前は両棲類、そして魚類へと分岐の枝が幹の方へ辿れます。

陸上動物はかつて海にいたが、海から陸に上がった。時期は古世代のデボン紀の終わりから石炭紀の始め（3 億 6000 万年前、成功には 1 億年かかったそうです）。

陸に上がるのに動物の体に色々な変化が起きました。例えば空気を大量にとりこむための肺が発達しましたが、肺（哺乳類）が鰓（魚）から変化したのが今の話題です。この上陸時の変化と類似の事柄がどんな動物の胎児で今も起こっているという主張があります。（「胎児の世界」（三木茂夫著））。

この肺の発達に関連した観察が三つあります。第一は三木の研究で鶏の卵の中身の各種器官が変化していく様子を、心臓に色素を注入し、その色素の移動で詳しく観察して、移動の仕方が 4 日目の夕方から 5 日目の昼頃

の間に大きく変化したのを発見しました。

三木は更に、一方脾臓（かつての増血器官）の状態の変化を追い、両生類であるオオサンショウウオでは、魚での鰓だった器官が退化しています。同時に脾臓が胃から離れていっています。胃が離れることが鶏の卵で4日目から5日目に起きていました。

つまり肺が出来るときに血液の流れ道が大きく変わったということです。単純化していうと、陸にあがるとき起きた大きな体の変化が孵化する鶏卵でも起きていたのです。

三木の発見と似た時機ですが、ニーダムは、卵の胚の分析で、4～5日目には魚の排泄物であるアンモニアが発生し、6～9日には両生類の分泌物である尿素が、12日目には爬虫類の分泌物である尿酸が発生したのを見つけました。

これら三つの研究を大雑把もまとめると、鶏の卵の中で、魚からワニ（両棲類）へ変化が5日目頃、ワニからヘビ（爬虫類）への変化が10日目頃に起こっていることになります。

個体発生（誕生と生長）は宗族発生（進化の過程）の繰返し、などと学者は簡単にいいます。トリという宗族が動物のなかに誕生する経過が一つの個体の生長の中で見られるという具体例です。

人間の胎児で、三木は32日から36日にかけての顔の変化を肉眼観察しました。ホルマリン漬けのものですが、32日にはサメの顔であったのが、34日に両生類の顔と変わり、36日には古代の爬虫類に似てきて、38日には哺乳類に入った感じを抱いたと書いています。受胎後40日に現われるのは獣よりヒトの顔と言えるそうです。人間の赤子の顔は何時現われるのか。70日を過ぎる頃だそうです。三木氏は顔を「おもかげ」という言葉を使って表しています。この言葉は原型といった哲学的な意味を含んでいて、顔という言葉と同じではありませんが、便宜上顔と書きました。

余計なことですが、鶏業者が雛を孵す仕事では「4日目前後に失敗が多い」とのことですし、人間の流産も受胎に親が気づきがちの時期、直後、3ヵ月ぐらいという経験も知られています。つまり海から陸に上がった頃

です。

ここで、単純だけれど重大なことをいいたくなります。「生物は過去と無縁ではられない、今、あなたの体の中に過去の記憶が残っている。個体の中でも過去を通り過ぎなければ現在はこない。過去は消せない」ということです。

私たちの生命は受精した一つの細胞から始まります。その細胞は人間の細胞ですが、じつは一つの生命体の細胞でもあります。生命のもっているあらゆる可能性をもっている。でも人間になる運命をもっている、人間が類人猿から独立する以前に辿った生命の道筋がその受精細胞に記憶されているのです。だから、生物が海から陸に上がるという大事件当時の出来事が、トリやヒトの母体のなかで起きた、そう考えるのです。

特定の個人、例えば私の、母胎内での体験は生命の原型からヒト発生までの経過そのものである。つまり私には生命の記憶があると言えましょう。ヒトが発生してからの記憶は次に述べます。

2・2 生命記憶

懐かしい味というのは、今も日常よく出会います。「おふくろの味」などという、料理の味が商品化されています。目でみる風景より、耳で聞く音より、舌での味わいが懐かしい、という原則は理解しやすいことでしょう。

その延長上の感じが三木のいう生命記憶です。どこで憶えたのか、自分の幼児からの思い出にはない、先祖伝来の感覚が生命記憶です。胎児が母体内で、魚類の時代を経験したように、我々の感覚の記憶に、一代ではない、何十代もまえの記憶が残っていると考えるのです。

生命記憶として三木が上げているものに、母乳の味、玄米の味があります。

味は舌で感知し大脳皮質で識別し、記憶されます。普通の味はそうです。生命記憶はそうではない。ここでは「憶」という言葉本来の意味で三木は使います。

「憶」は寒くも熱くもない、空腹でも満腹でもない、そういった過不足

ない状態をかたちとして示すのが「憶」という字です。温度や胃袋を人は日常、殆ど忘れていきます。ここは本来の「憶」という言葉に結びつけられる感覚を生むからでしょう。神経性（温度）体液性（空腹感）の出来事はホメオスタシスとって自動的に調節されるので、意識に登りません。「憶」状態から外れたとき人は不快になります。

こういった「憶」が無数に人の生命には本来備わっている。玄米も母乳も、その無数の「憶」の一つで、生命の奥に閉じこめられていると考えます。これが生命記憶です。生命記憶はヒトの発生以来の体験の一部が記憶されたもの、胎児の体験と似たものです。

生命記憶は何故味なのか。味に関わる口から喉にかけては、魚時代の鰓に相当し、胃腸の最先端部です。大昔にはここだけしか無かった動物もいました。だから命の要です。つまり生命記憶を引き出すのは脳神経系ではなく内蔵系で、命の要（カナメ）に関わるどころです。二つの系は次に説明します。

3章 ココロの記憶

3・1 ココロとアタマ

ヒトを含め動物は二大器官群、つまり胃腸器官系と脳神経系をもっています。簡単な動物、例えばミミズのようなものを原型と考えなくても、魚類からどんな形に動物が進化し、形が変化していったか、こんな研究を形態発生学といいます。その研究によって体の各器官を胃腸器官系と脳神経系とに分けて考えると、体の器官の発生が大変理解しやすいことが、明らかになっています。（三木成夫「生命形態学序説」うぶすな書院）

大昔の出来事の記憶は、二つの分類に即して云えば、どちらかという下次に論じるココロの働きとして胃腸器官系に記憶として残っていると三木は考えます。

アタマという言葉はココロと対比して使われます。アタマは脳神経系を代表するものとして、ココロは胃腸器官系を代表するものと考えます。アタマとココロは我々の精神を支える二本の柱です。アタマは「切れるアタマ」といわれますが、ココロは「切れるココロ」とは言われません。「温

かいココロ」とは言われても「温かいアタマ」とは言われません。アタマは判断とか行為といったものに対応するのに対し、ココロは感応とか共鳴とかいった心情の世界を作ります。

私は思うのですが、日本ではこの二つがまじって使われることが多いようです。「心貧しきものは幸い」などという有名な言葉や「無心」の使い方などがその例で、ここでの心は自我のことですから、本来アタマの世界でしょう。正しくは「アタマ貧しきものは幸いなるかな」です。

ココロは人の内蔵系にやどる働きの一つを示す言葉と考えます。内蔵は胃腸など消化器官、心臓、血管など循環器官、腎臓など泌尿器官と子宮、精巣など性関係器官を指します。消化と性が一緒になっているのは奇異に感じますが、動物の中には食と性の季節が全く違っているのが普通ですから、両者の相関を認めた、こういった分類も納得できます。これらの器官は脳神経系（体壁系とも呼びます）とはかなり独立していて、このグループ内で自律的に活動をします。考えなくても適切に食べることができます。

食べるということだけを取り上げると、これは先祖の体験が遺伝して、受け継がれているとしか、考えようがありません。動物が食べ物の選択巢全て親に教わっているか、経験を生かしているか、とは思えません。この記憶は遺伝している筈ですが、これは多分脳神経に関係する記憶でしょう。

ココロの働きを左右する事柄はこれとは違っています。内蔵系の中心は心臓だとは誰も考えることです。体壁系の中心は脳でしょう。さて脳とは違って心臓には記憶する力があるとも思えません。でも我々の先祖はココロを心と書いて、心臓との関わりを感じ取っていました。これは、民族を問わないことです。それに我々もココロでの理解というのがあるように、普通思っています。勿論脳の働きの助けを借りないと、意識に登ってはきません。言葉で気持ちを説明されても、ハートにピーンとこないという実感は誰もお持ちでしょう。ココロに貯えられた記憶、そこに突きささる言葉は、アタマでの説明とは違っています。直接的に、内部からつきあがっていき、アタマを刺激する、という実感は、経験としてはどなたもおありでしょう。でもそれが何なのか、今一つ説明は出来ませんね。

私がいいたいのは、ココロの記憶は生命記憶の一部に違いないというこ

とです。三木のいうように味覚と限らず、ある、と思います。それが森の影響を強く受けていると、私は考えます。

{この節は井尻正二「内蔵のはたらきと子供のころ」(築地書館)に触発されて、それとは無関係に、我流の意見として書きました。井尻氏の説とは無関係の文としてお読みください}

3・2 ココロのリズムに残る永遠

三木成夫だけでなく、ゲーテ以来、クラークスなどの偉人が永遠のココロを、自然現象との関わりで説明する努力をしています。森の影響と話は外れますが、ココロを理解する意味で触れます。

自然のリズムがココロに記憶されている、ココロの記憶は波動という形で内蔵に閉じこめられているという考えです。

そして二つのリズムが例にできます。両方とも月が関係しています。

第一は夜型人間の登場と関係があります。人間の生活は太陽が出て、入って、また出るといった明と暗を基調として組み立てられています。昔からそうだったでしょう。それに合致しない人が昔からいたようですし、今のように夜も明るいとますます、狂ってくる人が多いようです。学生は授業さえさぼれば、自分の体調で暮らせますから、この狂いがはっきり出ます。

第一の話はドイツでの実験で、時間のわからない睡眠壕で長期間生活させますと、1日が24時間ではなく、約25時間の生活をします。約2週間で夜昼が逆転します。このリズムは正に月が地球の周りを動いて、塩の満ち引きを起こす引力の影響と一致します。

第二は女性の生理です。これは説明するまでもなく、28日が周期です。28日のリズムが月の影響だというのは納得できますが、この他に、人には23日と33日のリズムもあるそうで、これについては何の影響か全くわかっていません。

この月のリズムは今も月の影響を受けているから、そのためという考え方もできます。そうすると、地球を縦横に活動する女性は多いから、月と人の位置関係は不安定になり、彼女らの生理はメチャメチャになるはずで

す。そんな話は聞いていません。女性のリズムは環境と関係なく体内にあるからだと考えます。だから次の考えが正しいでしょう。ヒトは3億年まえ、海から陸に上がった。その前は海にいて、塩の干満の影響をまともに受ける日々であった。塩の干満つまり月からのリズムは記憶され、子宮を含む内蔵系に記憶されている。そう考える方が極めて自然ではないでしょうか。

夜行人間の登場で、男性にもそのリズムが刻まれていたことがはっきりしたとするのは可笑的でしょうか。

季節もヒトにとっては内蔵系に刻みこまれているリズムの一つだと三木はっています。春、動物達が発情する。ヒトも春を感じ発情するが、同時にそれが意識の底から登り上がって、脳を刺激するような「春情」といったものを感じる。これは「発情」とは確かに異質です。もっと「そこはか」としたものです。陽光や風のそよぎという感覚からの情報で、内蔵が共鳴して、大脳皮質に送った信号だと、三木氏は説明します。

ココロという日常的なものを正確に定義しようと思うと、このように自然現象の遺伝的記憶という形になるのでしょうか。その場合、リズムと言う形で、自然から内蔵にインプットされたもの、それが刺激されるとき、ココロが発現するというのが代表例となっています。リズムが自然と人の内蔵を結びつける絆と考えるのは、大変に興味があります。

どうでしょうか。ココロつまり内蔵系に記憶があるのは当たり前ではありませんか。

3・3 森は日本人の生命記憶か

さて生命記憶と日本人の森への反応との間に私は似た関係を認めます。ちょっと前に触れましたが、長い間、森で暮らしたことと、木の文化と言えるほどのものが日本で発達したことが、関係があると考えられます。

「住む」ということが、「そこにいた」というだけのことなら、住んだ人の思い出に残るだけでしょう。今議論したいのは「共生」という程に深い関係を周囲と結んだ場合です。この言葉はこの頃安易に使われますが、単にギブ・アンド・テイクだけの関係なら、こんな造語は無用だと私は考

えます。幾つかの生命が深いところで関わり合い、お互いが生き方、つまり体の仕組みを変えて、共存していかれるようになる、これが今私が議論したい「共生」です。生命体とは本来的に共生できる仕組みを内蔵していると考えます。このことを反対の角度からいうと、体の仕組みをかえる、という共生の仕掛けが働かなくなった生物は、生命体として地球上に存在できなくなるということになります。

森で暮らした日本人が木の文化といえるものを作ったとしたら、生物として仕掛けが働き、森と共生していたからにはほかならないと思います。これが木の文化を生んだと考える原則です。三木の言葉を使えば森が日本人の生命記憶の故郷だと私は考えます。これは自然科学者は認めにくい話でしょうが。

進化論では生物間の争いが地球の生物を発展させてきたそうですから、「共生」なんて反対の議論です。

進化論は強いものが勝つのですから、それは食物という観点からすれば生命の本質を言っています。でもこれは生命生存の一面です。地球という限られた空間で、多様な生物がいるには別の原理があると私は思います。「共存」こそ、この原理です。空想です。

この空想は三木の「生命記憶」だけでなくラブロックの「ガイヤ仮説」に触発されました。ガイヤ仮説は20年前頃から有名になった話です。「地球はガイヤという名の生きものである」という仮説です。ガイヤはギリシャ神話の女神の名で、この頃散見され、宮崎県の施設の名にさえ使われるましたが、ガイヤ仮説のせいでしょう。提案者ラブロックの説に依れば、人は、様々な生物と地球に共生しているものの一つで、岩石や河川なども含む地球という生きもの（ガイヤ）の一部です。丁度、人体が腸内細菌や病原菌（生物）や無機質な歯や背骨（岩石）を持ち、水（川）という通過物質を含んでいるのと同じです。この仮説は、地球を人工衛星から始めて眺めた人類が、地球資源の有限性を知り、考えだした、大変に面白い仮説です。人類は神様から選ばれた動物という西洋流の考えより、ガイヤ神の一部という考えは、東洋的、魅力的です。女神の命に役だたなくなると、その生物、例えヒトだって消滅の方向をとることになります。この思想に

立つと個別の生物の競争だけでなく、生物間全体の調整が大事なのがわかります。

ガイア仮説が、森と日本人との関係を密接にしたことと、具体的にどんな関係するか説明します。似た情況が古代の日本人にはあったと、この頃の考古学の成果を読んで私は思います。ガイアの例えに従えば、地球が森林に相当します。古代の日本人は、森というガイアを支えるごく一部として自分を意識していたのではないかと私は思いました。森の一部として、全てを森に依存して彼らは一生を送った。殆ど森だけから必要な物をもらったのです。交易ということはあったにしても、周囲の森の破壊が自己の破滅につながるのを多分知っていたでしょう。地球の破壊が人類の破滅を招くというのを、今多くの人が知っているのと同じです。

当然日本人の精神性や物質性は森林の影響を強く受けることになったでしょう。それは「生命記憶」として今も我々に残っている筈です。さっきの地理学者鈴木さんの考えと似ています。

日本人だって他の地球人に遅れて森の破壊を始めました。はじめは処女の如く、やがて脱兎のように早く、木を森から奪ったのです。後で深くみえますが、この破壊の仕方に先祖の森との「深い関わり」方の影響が現われています。また、「深い関わり」は破壊した森を修復する努力の原動力で、思想性と物質的期待とが対等の重みを占めていることにも強く現われています。

今流行っている遺伝とか進化とかいうのと別の原理を考えると、この事実は説明できます。それが「生命記憶」といったものが存在すると考えた理由です。遺伝して残るのはアタマよりココロだという説をもう一度、思い出して下さい。ココロに着目して「森と人」の話続ける理由です。

Ⅱ部で参考とした本

- (1) 鈴木秀夫「森林の思考・砂漠の思考」NHKブックス

- (2) 梅原猛「森林の思想が地球を救う」講談社文庫
- (3) 三木茂夫「胎児の世界」中公新書
- (4) 三木成夫「生命形態学序説」「人のからだ」うぶすな書院
- (5) 三木茂夫「内蔵のはたらきと子供のころ」築地書館
- (6) 井尻正二「進化とは」築地書館
- (7) 三木茂夫「人間生命の誕生」築地書館
- (8) 吉本隆明「匂いを読む」光芒社
- (9) J.E. ラブロック「地球生命圏」工作舎
- (10) J.E. ラブロック「ガイアの時代」工作舎
- (11) 善本知孝「森はレモンの香り」文一総合出版
- (12) 日本地下水学会編「名水を科学する」技術堂出版

Ⅲ部 精神性と森の維持

1 章 森林の状態

(古代)

最澄、空海が生きた古代には森を壊さなかったという、むしろ逆です。

奈良遷都は 761 年、平安遷都はその 10 年後で、古代での最大の森林破壊が 600～850 年の間に起きました。古代国家が成立して、奈良と平城京とその周辺を中心に、膨大な寺院、神社、宮殿、御殿などが立てられたのです。木造ですから、畿内の盆地に隣接した山地にある原生林は完全に切り尽くされました。この破壊は 600 年以前のものとは桁違いに大きく、洪水、土壌浸食といった災害を引き起こし、森林保護と回復の暫定処置がとられたほどでした。

どのくらいの木を切り倒したか、わかっていません。1 ヘクタール（100 メートル四方）当たり土地にあるヒノキを 450 立方メートルとすれば、東大寺一つ建てるのに 900 ヘクタールの林が消えたと計算した人がいます。似た論理を使って当時建立した寺院の総数から消えた森林面積を計算すると 9 万ヘクタールにもなります。しかもこれはヒノキの純林としての計算値で、実際はこの数倍になるでしょう。

どの地方の森が切られたのでしょうか。

これらの森林破壊は近畿地方全体に広がっていたと想像できます。奈良の都造営のときに大和中央部にアクセスが良いのは、琵琶湖周辺の近江西部の森林（高島柚一琵琶湖経由や船坂柚～保津川経由）、南部の森林（田上柚、国見柚）、東部の森林（甲賀柚、貴船柚）でした。長岡や京の都の時には山城や丹波の山が資源でした。更には畿内で唯一まとまっていた山国柚の森林を切り、大堰川（大井川）を流して集材したそうです。木材は運搬が困難な材料ですから、消費地の傍の森が先ず切られるのです。畿内の森林は軒並みに切られました。問題は木材の質です。天皇一族は住居に対する好みが高く、ヒノキの、しかも色、香、木目のいいものを選んだから、森林の中でも限られた樹木が対象となった筈です。このことは優れた文化遺産を生んだ反面、日本の美林を破壊しました。勿論、造林技術はなく、全てが太古以来の斧の入っていない原始林が消えたのです。(4)

「森の思想」の形成と森の破壊が同時に進行したのは歴史の皮肉でしょうか。そうは思いません。森の思想が「森を大事にしよう」などというアタマの働きより、ココロから突き上げられて生まれたものである証拠と考えます。突き上げの動機に森があること、これは日本人の森林に対する態度の特徴のように私は思います。このあといたる処に出てきます。奇妙な分裂症状です。木を愛するのに木を切り倒し、鑑賞するのにも似た矛盾がありますし、手入れをした森林を原始林より好むなどという近年の傾向にも日本人の特異な森への態度が見えます。

(中世)

鎌倉時代は武家が台頭し、中心が京都から鎌倉という新し土地へ移りました。関連して神社、寺院が建設され、関東、東海から木材が集められました。当時は古代に伐採された針葉樹のあとに広葉樹林が誕生し、それが身近な原料として、農業の資材となったようです。新しい生態系の誕生です。森は太古以来存在する天の恵みとしてより、財産として意識され始めたようです。

1050年～1550年を日本の中世とみなすと、この500年間では人口が1000年当時650万であったのが、二倍となっています。この事実からわかるのは

食糧生産が行われたということです。少し考えると、このためには農業生産力が増大した筈であり、それが可能だったのは、土地の確保、つまり森林が伐採されたことや農具の充実つまり鉄生産のための燃料材の採取が顕著に行われたこと、それに森林からの肥料原料や燃料の持ち出しなどが起こったせいでしょう。畿内では森の変化は激しく、低木林や松林が増加したのがわかっています。

庶民の燃料の使用は個々では少なくとも数が多いから、総量としては膨大なものとなります。

それにこの頃は製塩も盛んになり、薪の使用も多かったでしょう。

一方権力側は大型建造物の外、青銅の仏像を作りました。古代の例ですが、東大寺の仏像のため使われた木炭は2万石以上のクリが使われたことになります。数百ヘクタールの森林が破壊されただろうとの計算があります。(4)

畿内以外ではそれほど深刻な状態にはならなかったでしょうか。

隣接する東海地方や瀬戸内地方では針葉樹と広葉樹の混交した林が消失し、広葉樹が根のわきから萌芽をだし、広葉樹林となり、あるいは針葉樹林と混交した林に変わったことでしょう。

このように人口の増加と官民呼応しての森林の破壊が日本の森を裸にしなかったのは不思議とさえ言える事柄です。砂漠化した痕跡は中国地方にごく短期間あったに過ぎないとされています。

農業と森の破壊の関係がイギリス南部での出来事で研究されています。ローマ人がそこを本国への食料基地とするため、森を破壊し、重粘土質の土を鉄器で掘り起こし耕地化しました。破壊と製鉄のための薪炭製造で、森は修復不能の状態になりました。幸いにも気象的に草地化は可能だったから、イギリス南部の砂漠化は避けられた。似た取り扱いを受けた地中海沿岸の幾つかの地方は低質の林になってしまっています。(5)

この期間に森林の保護政策がどう行われていたかはよくわかっていませんが、残された文書には海岸の保安や集落の防風のための植樹の記録があります。農業による森林破壊は古代の建築材のための破壊と比べて穏やかでしょう。だから生産より、植樹が目立つのではないのでしょうか。

鎌倉幕府は勿論畿内にはありません。鎌倉幕府は 1185～1333 年関東三浦半島鎌倉に開かれました。当然その間は政治の中心は京都を離れて鎌倉に移ったし、幕府の建物以外にもお寺や神社が作られ、莫大な木が使われました。供給は伊豆、駿河、天竜川下流域が中心として行なわれました。比較的粗末なものが多かったとは言え、円覚寺など大寺院のためには木曾谷から運ばれた記録があります。それに都市に火事はつきもので、小さな町全体が燃え、再建する必要も何度か起きたそうです。

そうは言ってもやはり文化の中心は畿内で、その消費が大変大きかったのは間違いありません。

東大寺再建の記録があります。1181 年東大寺の再建がきまってものの大仏殿用の木は畿内にはなく、周防国（山口県）佐波川上流からの運搬が決まりました。9～10 丈、径 5 尺 4 寸の巨木を引くのに、岩を削り、谷をうめて道 300 丁をつくり、ロクロ二張りを 70 人が押し、大綱 6 寸 x 50 丈を 50 人が引いたそうです。佐波川を下る 7 里の距離に 118 箇所堰をつくり、海へ出し筏を組んで大阪へ、そこから淀川、宇治川、木津川を通過して奈良に辿り着いたとされています。これをみても政治とは別の畿内権力のありようがわかります。

（近世）

1570～1670 年を近世とすると、そこでの森林の掠奪は古代の掠奪を大型化したものでした。豊臣、徳川を中心とした新しい支配層は、またもや立派な記念建築物や都市の造営を望み、建築ブームが起きました。古代と違うのは、今回の掠奪が全国規模のもので、この 1 世紀の間に列島の殆どの高木は消えたそうです。

大名たちは乏しくなった資源の保護や環境の損傷に対処もしました。専門の山方役人をおいて見張りを強化するとか、耕地化を禁止するといったものですが、これ以上切らないという意志がそこには見えます。木材生産のため植林も行われ始めました。そして 17 世紀末までに林地とその収穫物を管理する複雑な仕組みが出来上がりました。しかし保護や植林も自分たちの取り分を確保するためのものでしたから、増えていく需要のために、

森林の荒廃はますます進み、17世紀末には原生林はなくなったと言われています。

中世から現代までの人口の推移として次のような記録があります。

700年＝500万人、1200年＝700万人、1600年＝1200万人、1720年＝3100万人、1870年＝3300万人、現在＝12000万人

原始林の喪失の見返りに豊臣、徳川の時代に人口は2,7倍に増えました。

- 1) 梅原猛「森の思想が人類を救う」
- (2) 安田喜憲「森を守る文明・支配する文明」
- (3) 司馬遼太郎「空海の風景」上・下(中央公論社)
- (4) コンラッド・タットマン「日本人はどのように森をつくったか」(築地書館)
- (5) ジャック・ウエストビー「森と人間の歴史」(築地書館)・
- (6) 「日本の森と木と人、p 112」

2章 植林と精神性(17世紀まで)

大宗教の根本思想に、森に住んでいた縄文人の思想(I部1・3森の思想p 9)の特色が現われることから、森は精神的には日本人の一部分となっている、(これを私は「生命記憶」と呼びました)と考えます。すると思想の形成時と似たことが森に働きかけるときの判断にも、この特殊な精神性が働くという理屈になります。

森の仕事を考えます。昔は伐採、運材、木材の利用でしたが、やがて治水が考えに入り、森を管理する時代には下草刈りや保護となり、やがて体系的な造林となります。

主に近世以降の時代を取り上げるこの章では、精神性が最も顕著に見られる仕事として植林について述べます。

精神に対する言葉として物質を思いますが、物質的な見返りを期待しての植林はあります。でも木が物質的に使えるには苗から60年の歳月が必要です。人の一生には長すぎるためか、昔は夢を見なければ木を植える気持ちにはなれなかったようです。その夢の見方にココロに潜む森の思想の反映を追います。

2・1 森と水

日本では森は水と離れて考えられません。森が破壊されると、そこに降った雨は木々に保たれることなく、流れ出します。水田は森の水の受皿で、田の収容能力を越えると過剰な流出水は洪水を起こします。

弥生時代には治水の神様がありました。それと同時に植林の神様もありました。木が生えるのは神の業でした。四世紀末には山守部（やまもりべ）という役職ができて、山林を監理し、守ったと「日本書紀」に書かれていますから、森の管理を幾分か人の仕事とし始め、治水をしていたことがわかります。

森林伐採禁止令として残っている最古の記録は、676年のものです（日本書紀）。飛鳥川上流の草木採取、畿内山野の伐木を禁じるとの令がでています。背景には大きな土木工事が周辺で行なわれ、森林が荒廃したためでしょうから、この場合森は人の畏敬の対象より、物質的害を与えるものと考えています。

そうではあっても森の神性が無視されなかったのも事実です。

水田耕作が一般化してからの話ですが、水田耕作のため山（森）を共同利用する入会共同体は、その地区の神社や寺の修理と同じ会計でやっています。入会農民は水田耕作を生業として定住したのにその中心として鎮守の神を彼らはもっているのです。つまり森と鎮守と稲作を結びつける伝統が共同体の中に作りあげられていたことになります。物質的利益があってもその背後に森があった場合、日本人はそこに神の存在を感じていたようです。(1)

2・2 社の森

森を作るのに日本人に特徴的な精神性が働いた具体的な例を示します。森に神が宿るといふ信仰が人々に神のために森をつくる行動をとらせた話です。

神奈川の箱根に近い南足柄市にある大雄山最乗寺境内のスギ林があります。この寺は曹洞宗の名刹で、1394年改築の記録がある古いお寺です。

400年前から植栽の記録があり、今は1ヘクタール当たり2642立方メートルもの立木密度があります。大変な量です。太さは直径1メートルにもなるのが普通で、高さは平均40メートルです。これらの多くは信者が寄進した苗木から育ったもので、寄進者の名前と本数が参道に残っています。精神的なことが動機で植林に金が使われた例です。(1)

三峯山は東京都を流れる荒川の源流にあります。そこは縄文時代以来の聖地で、山の神はオオカミだったそうです。弥生時代となって神はイザナミ、イザナギ二神となり、オオカミはその使い役となってしまいました。オオカミは春になると平地におり、稲作を守り、収穫が終わると山にもどるとされています。

ところでこのオオカミを祀る三峯神社は関東一円だけでなく広く北海道まで信仰を集めていました。東京墨田からは100キロ上流に過ぎず、今は電車で麓の秩父湖に日帰りで遊ぶのも容易ですが、往時は数日かかったことでしょう。そうまでして1000メートル弱の山頂に赴いたのは稲作を守ってくれるオオカミに対してでしょうか。どうもそれだけではなさそうです。その精神は何だったのでしょうか。

このごろの研究に少し納得のいく説明があります。オオカミが森を守るものと位置付け、森への崇拝が彼らを参拝行動に駆り立てたとの説です。オオカミがいないと森はどうなるか。今カモシカやシカが森の新芽を食べて荒らしています。オオカミは1905年に日本の山から消えましたが、それまでは森の生態系の頂点にあり、シカを食べてくれました。そのことを昔の人々は知っていて、オオカミ信仰を続けた。結果として信仰の山が維持されたとするのです。この解釈は森の聖なる働きへの日本人の信仰を認めています(2)

2・3 神を感じて森を造る

第三次の森林破壊は武家政権が樹立された17世紀(1603年徳川幕府開設)にあったのはⅢ部に述べた通りですが、その頃に植林が各地で始まっています。権力側の意図によるのではなく、識者の善意で行なわれたのが特色です。この場合、植林は森の精神性に留意して始まっていると私は思

います。造林の先覚者の数人（大谷休泊、古橋源六郎、粟野林太夫）は 16～17 世紀の人で、彼らは山や森を神に見立てる信仰の持ち主です。（3）

大谷休泊は今日の群馬県館林市で 1521 年生まれ。時はまだ織田が天下をとる以前の大乱の時期でした。彼は利根川と渡良瀬川の合流地点で水田開拓や畑地の開墾をし、また現在の多々良沼あたりの館野が原に 519 ヘクタールの森林を造りました。当初松苗 8 万本を植林したのが枯れたのを契機に、その原野の中央に山の神の霊を祀り、以後 21 年間マツを植え続けました。その数およそ 150 万株、今大谷原官有林と呼ばれるのがその一部です。この林は防風林として位置付けられていますが、植林に営利的な経過はなく、森に神を感じる日本人の感性を私は感じます。

粟野林太夫は 17 世紀始めに静岡県磐田付近で 6500 坪ほどのマツ、スギ、ヒノキの林を原野に造った人物です。時期は関が原の合戦も終わった頃で家康は健在でした。磐田の原は不毛の「いばら地」として知られていたから、彼が開拓の許可を願い出たときに何の反対もありませんでした。彼は開拓の移住者をつのり、自己所有の林と共有の「御林仕立」とに分け、植林事業を始めました。事業が初期の成功を収めたあと、林内に開拓森林を祀る祭壇を設け山の神を祀って成功を感謝し、その後の事業の継続を祈願しました。この祭祀が契機となり、植林は一層発展して「御林仕立」212 ヘクタール、個人所有の林 160 ヘクタール、植栽本数 50 万本という当代屈指の植林事業となったのでした。

古橋源六郎（1823 年岐阜生）の場合は、植林が盛んになってからの出来事ですが、彼は天保の大飢饉（1833～37）に出会って山林家になることを思いました。つまり「山には山の民の生き方がある」という発想です。「山の民には樹木、平地の民には農産、海辺の民には魚塩の幸がある。それぞれそのところから誠を致すものに幸を受け給うのが神の御心である」と悟って、65 才にして発起し、1887 年に計画成就を記念して山の神を祀っています。ここにみられるのは自然尊重、自然順応の思想です。

このような例は砂防、収穫など特定の目的が薄く、森を作ることに意義を強く感じている例と私は思います。日本人の精神が森林と深いところで結びついていると思いませんか。

2・4 儒教と植林

17世紀から18世紀には、森林管理の考えが権力者全般の流行になっていません。徳川幕府、特に三代家光の元禄時代（1688～1704）に儒学が権力の公認する学問となりました。儒学は儒教とも呼ばれますが、政策的に儒学の名で、世俗的出来事の基本思想として位置づけられたのです。以後仏教はあの世を取り扱うこととなります(4)。

仏教は律令国家の思想的背景となった輸入思想ですが、Ⅲ部の始めに述べたように、日本的に変容され、自然尊重の精神がもりこまれました。

儒教には本来自然尊重の思想はありません。でも徳川政府の思想的背景となったとき、日本の変容はありました。時代が進むにつれ、秩序の維持に都合がいい方向に変化したそうです。その過程でも自然との関係はとりあげられませんでした。

江戸時代の初期、陽明学、朱子学など新儒学と呼ばれる系譜の学問をした人に植林に努めた人材が現われます。新儒学は実学であるという以外、森林に対して特別な理念はありません。当時最も新しい学問として中国から入ってきたという事情があったから、学説の細部、上記の自然観などへの拘束は少なかったのでしょう。高潔な志の人は伝統的な自然尊重の発想をもちました。

二人の学者の話がよく話題にのびります(1)。

熊沢蕃山（1619 生、岡山藩）はこう述べています。「山と水との融合、一体化により荒廃を防ぎ、森林の恵みを享受できる」。まさに日本の自然なればこそ生まれた森林観の一つでしょう。「草木を恵むものは雨であるが、その雨は草木が茂り、神気がこもっているならば恵みとなるが、草木なく神気が薄ければ恵みとはならない」「土砂流出の害を防ぐには上流水源地の森林の荒廃を復旧しなければならない」「山と水の融合、一体化により荒廃を防ぎ、森林の恵みを享受できる」。

神気の「気」は中国伝来の考えで、実在するエネルギーです。こうみると、彼の植林思想は、森林と神の業を結びつける、伝統的自然観です。

野中兼山（1615 生 土佐藩）は「天地、雷電、草木のような自然の営み

を人間は行うことができない。しかし自然は船をつくったり車を動かしたりすることはできない。人間の営みは自然が行うことを補完するだけである」とする思想で、番繰山方式とする植林を行いました。それは 20 年生の広葉樹林の薪を生産する場合、広葉樹林を 20 区画に分けて毎年一区画ずつ順番に切り、20 年目にもとにもどるという方式です。利用と環境保全との調和思想が早くも感じられます。また日本人の伝統的な自然観である「自然の摂理に適合しながら自然の恵みを楽しむ」という思想の延長にもあると感じます。

植林に意を尽くした儒学者の一人、蔡温（1682 琉球）の「山気説」は琉球の風土に適する独自のものです。「山気をもらさないのが自然の理である。山気を閉じこめる抱護の山を堅固にせよ」ととき、「陰陽の二気と木火土金水の五行が自然の運行の基礎にあり、それは山気の籠もる森林を維持することにより、その運行を円滑にする」と説きました。乱伐を戒め、植林をといたのですが、この考えは中国の儒学にある二気、五行の哲学を森林にあてはめたととれ、日本の伝統的な自然観とは少し違っています。儒学の考えには人も「気」の凝縮したものとあり、ここでは「気」を通して人と自然は結びついています。

蔡温の考えが論理的に感じられるのは「人がどうして生まれてきたか」について森との関係の理論構築があるためと私は思います。

このような権力者側による植林には、16 世紀から 17 世紀にかけて目立ちました。顕著な森林破壊が社会的に認知される直前という背景をもっているせいでもありましょうが、実施動機には森林崇拜があるのが以上の言説に感じられます。

3 章 森の利用と造林思想（17 世紀以降）

1 章では植林に、日本人の生命記憶と呼べそうな「森の思想」を求め、17 世紀初頭までは、植林と「森の思想」にある程度の関連を見つけました。

豊臣、徳川による天下の統一で記念建築物の建造が相次ぎ、今度は日本全体の森林が破壊されました。その結果土壌侵食と洪水が広範囲で起こり、林地の利用権を巡って争いが各地に頻発することになったのです。この情

況は権力側にも由々しい事態と映じました。森林管理の考えが表面化したのです。ここでは、従来あった「森の思想」への配慮は少なく、利用制限、植林などが行われました。「森の思想」は終焉に向かったかのようです。

以後 400 年間の特色は植林の願いが「森の思想」と離れ、より実利的となったことです。結果は次にみますが、植林の目的と現実の森林利用との間に矛盾が生まれたのが特色です。

3・1 徳川時代—森林管理の始まり

第二の森林の大破壊は 1570 年から 100 年の間（17 世紀初頭）に起こりました。破滅的な情況は権力側にも由々しい事態と映じました。森林管理の考えが表面化したのです。

幕府による森林管理の第一目的は都市の建設、記念建造物の用材確保にありました。次は保安林の維持です。これは森が乱伐されると、河川があれ、農地を侵食し、食料の供給に支障が起こるからです。

支配体制を確保するという極めて現世的な考えに基づきます。

先ず生まれた考えは利用の制限です。

(利用制限)

17 世紀後半を中心とした 1630 年から 1720 年の間に森林の消極的な管理が行われ始めました。内容的にみると、幕府や大名が用材林の利用を制限したり、変更させたりする措置です。これにより伐採は制限され、特に低木が保護されました。このため天然更新の促進がなされたのです。

天然更新とは自然に落ちた種や穂、芽生えを利用して木を育てることです。上記処置によって畿内、瀬戸内、濃尾を除けば禿げ山の誕生は避けられることになりました。

天然更新のためには邪魔になる草や枝を除去するのが普通です。そうしておけばナラやクヌギなど広葉樹は根からの萌芽でも発育しますし、スギさえも湿度温度が整えば種から生育します。

ここには権力側にも山を育てる考えが芽生えてはいます。

しかし村民にとって森林は、農業用資材や生活の道具で、現世的利益の

一翼を担うものです。17 世紀当時、森林の所有権という考えは殆どなく、利用権という、誰が利用していいかの権利が大事でした。個人が権利を持つ「百姓山」、村民が共同で権利をもつ「入会地」がそれです。これは支配者が所有を主張する「御林」とは別物でしたが、権利は錯綜していて、しばしばトラブルが起きました。支配者は保安のため百姓山や入会地の伐採を制限しようとしたし、村民は用材の殆どない「御林」に入って、農業資材を取ろうとしました。1657 年明暦の大火は此の争いを決定的にしたようです。もう山に木がなかったときの大火は泣きっ面の蜂の事件でした。

(伐採)

建築用材として使える木材を取る森林はもっと強烈な管理がおこなわれました。管理以前に権力闘争があったほどです。著名な例が飛騨地方にあります。17 世紀、飛騨領は高山の地頭、金森氏によって支配されていました。幕府の

指導層は木材事情の悪化し始めた 1690 年代から、ここに目をつけ始め、1692 年にはこれを取り上げています。金森氏の領地がえをして、そこへ代官を送り込んで、管理を強化しました。そしてついには江戸から商人を送り込みます。こうして大量の木材が搬出されますから、100 年後の 1770 年と 1790 年には伐採禁止の指令を出さざるをえなくなっています。(5)

このように木材として使える木の伐採は、生産物が生育地とは違う場所で使われるのが普通になりました。治水とか、農業とか、生産地周辺の事情は考慮外となり、当然、森住む神は視野の外に消えました。今農作物の殆んどが生産者の見えないところで消費されるのと似ています。

(植林)

次に現われる考えは生産のための植林です。

近世の植林は農業技術の一つとして誕生したのは少し故があるようです。徳川の社会は食糧を含めて、殆ど全てのバイオ産物が不安定であって、年ごとに欠乏していきました。森林生産物もその一つで、それは農業生産の資材でもありましたから、生産の現場では増やそうという努力が行われ

ました。地方を巡回する指導者、村役人、篤農家、下級官吏が書いた「地方書（ジカタショ）」をみるとわかります。これらは農村にかかわる事項のマニュアルで、包括的です。技術、農業慣行、環境条件、労働、思考の慣習、人間関係、村の組織化などで、個人レベルの生態学のようなものです(5)

こんな流れの中で植林の技術が普及していきます。17世紀末の「地方書」のうち「地方聞書」が有名です。また宮崎安貞の「農業全書」一〇巻の中、二巻が林業であり、その中で「山林に価値ある樹木を植え、無用のものを取り除き、農作物と同じようなやり方で育成すべし」と説いています。有用木はスギ、ヒノキが例に上がっていて、特にスギの利点を強調しています。

18世紀前半には数多の造林書も出版されますが、それらの一つで佐藤信淵は「開物（カイブツ）」という考え方を披露し、その土地にあった生産力を開発して、自然の生産力を拡大しようと主張しています。これは自然力に似た発想であり、自然は神の支配するものとの考えに近く、興味があります。

江戸時代には現在も行われている造林技術の多くが確立されました。その間の事情は徳川宗敬の「江戸時代に措ける造林技術の史的研究」（1941年刊）に詳しいそうです。

（期待と成果）

人工造林が盛んになり、日本全体に広まったのは18世紀の後半です。その成果が収穫となって現われるのは19世紀前半です。

1830年代政府は高齢の原生林に依存することをやめ、人工的に置換された林木のストックから用材の需要を満たすようになりました。

17～19世紀の造林は、日本人独特の「森の思想」の現われとは到底思えません。森の造成と利用の間に予期せぬ整合性が現われました。森が建築用材の産地であっただけでなく、生える樹種によっては農業資材の供給基地であったことに起因します。

それ以前、山への人の需要はスギ、ヒノキ、サワラ、ヒバなどの高齢針葉樹原生林でしたが、これが伐採され、時間がたつと、林地は広葉樹の多

い針葉樹との混交林となります。多くの地域では広葉樹は落葉性、暖温帯の沿岸部では常緑性です。両者とも記念建築物に使える高級材には向いていません。

このことを極相という考え方で説明します。極相とは林学の考えかたで、特定の土地に生える木の種類がじょじょに変化し、最終的に到達する樹種の構成を示します。そこで森が破壊すれば、始めからやり直すこととなります。

当時伐採前針葉樹原生林はその地では一つの極相だったのです。今の話題は 18~19 世紀僅か 100 年の出来事です。造林して生まれた森林は極相とは全く違います。植林したスギやヒノキは 100 年たっただけです。

植林も天然更新(造林方法の一つ)も、100 年では成果が期待外れだったこととなります。

現実是不満に満ちたものであったか。当時の事情を思うと、そうでもなかったと私は思います。

少なくとも農業用水の利便や治水には役立ったでしょう。加えて 18~19 世紀の日本人が森に何を期待したかということを考えてみます。徳川時代、人はゆっくり待って壮大な寺院のための針葉樹材生産を望んだかということ、そうではなかった。現実の問題は第一が飢えであり、食料生産のための肥料が必要で、更には調理用の燃料が必要だった筈です。従って伐採跡に生えた広葉樹は結構当時の社会には有用だったでしょう。

徳川の鎖国政策は外国からの資源の供給をきらいましたから、当然自国内での資源のみが頼りです。国土の 3 分の 2 を占める森林は建築用材生産、農地への転換、農業資材の供給という多面的な機能をもっています。そのどれを選ぶか、当時としても選択肢はあった筈です。

森林管理の厳しい徳川幕府ですが、人口を 3000 万人に維持するため、つまり現状維持の政策を 300 年とり続けるためには、山林の利用もその反映となったに違いありません。広葉樹の伐採は認めていました。強い森林の管理とささやかな植林、それが結果として森林と環境の破壊を食い止め、緑の多い国土を維持させました。

勿論、長期にわたって人が林に入って有機物を持ち出せば、木の生育の

ための栄養分が欠乏状態になり、やがて土壌は疲弊し森林は荒廃に迎うのは、畿内や瀬戸内でこの時期におきた筈です。

このようにみると、スギ、ヒノキの植林という実利的な思想での結果は森林の復権とは現実には結びつきませんでした。全く違った理由で、違った内容で、山に緑を残す結果とはなりました。歴史の皮肉です。

3・2 明治の改革

(地木結合論)

明治時代となって日本国は西洋に似た近代国家を作ろうと決意します。日本にはキリスト教に根を持つ近代科学は全くありませんでしたが、科学の成果を出来るだけ早くいただこうと決めたのです。森林生産物の利用が、例えば科学の成果である鉄道の枕木であるとすれば、枕木を供給できる森林作成の思想、理念も必要だったわけです。そうでなければ、枕木も外国に依存しなければならなくなります。

森林国日本の施政者はさすがにプライドが許さなかったようです。東京と横浜を結ぶ8里、京都と大阪の10里、大阪と神戸の10里に鉄道を引くため、必要な枕木や電柱は建設地の100里も外に森林を求めたと報告しています(明治9年、1里は3.76キロ。)

しかしこの需要は常識を覆す大きさでした。明治初期に政府は各府県に山林の状況報告を求めましたが、答えは「山林荒廃ゆえ土木・建築・鉱業用などの木材需要に応ぜられない」とのことでした。

以後明治30年(1897年)の森林法制定まで、長い長い議論が展開します。

要は森林にある国土保全の役割りと木材生産の役目をどう両立させるか、ということです。矛盾する二つの役目は、最終的には「森林の取り扱いとは地木結合論を基礎とする」ということで合意がえられました。(筒井「森林文化への道」)

地木結合論とは気候、土壌、地勢などの自然条件に適するように森林を育て、伐ってこそ土地の生産力を最大に発揮できるとする思想です。「自然尊重、自然順応」が

森林育成の基本だというわけです。農業書で扱われた江戸時代の植林とは

大きく変わりました。

(地木結合論と伝統的自然観)

自然の恵みを利用するためには、自然を損なわず、自然の活力を維持するよう利用の仕組みを探る。これは自然尊重を旨とする日本の伝統的自然観と一致しています。自然を征服するといった考え方とは正反対のものです。自然を征服することで成果を上げてきた西洋の科学に、このような日本の自然観を応用するのに無理がないはずはないのですが、ともあれ地木結合論はなかなか評価すべきものでした。

さて、このような結論となる背景に、どんな日本人固有と森林観があったのでしょうか。第一は山と水の融合論です。山つまり森ですが、日本では森と水が一つものだということです。この融合がないと荒廃し、恵みである木材ももらえなくなるとする考え方です。たしかに日本の滝のような川は森がないとき暴れまくり、田畑の灌漑も不可能となります。

第二は自然順応である入会の思想です。農地に必要な資材を山林に求めるのに過大な資材の持ち出しは森林を荒らすので、節度ある姿勢で使うとする考えです。共同の林野である入会地の利用には人間の欲望を制限する必要があると考えました。

第三は時をもって山に入る思想です。自然の恵みを受け取るには自然の理法に適合した受け取り方があるとしたのは孟子の教えです。土地の地味をよく知り、地力を維持しながら適地適木、適地適産することにより最大利益をうる。これは前述の宮崎安貞の考え方でもあります。(1)

1897年の森林法(明治30年)は今日目でもみても大変斬新です。これが具体的にどう運営されたかは史家の評価に委ねるべき事項です。

第2次大戦中の法律制定を追って見ると

素人の目でもみて重要な事項が幾つかあります。昭和13年の総動員法の制定があつて、

国防目的のため、議会の審議を得ないで、物事が決まることとなります。次の年森林法の改正が公布されます。翌15年国有林の施業計画にとらわれない増伐の通牒が出されます。次の年、アメリカとの戦いがはじまりま

すが、木材統制令が交付され、立木の伐採が強制できるようになります。森林法、木材統制令と別の根拠で、山林局は植伐計画、及び、立木伐採計画編成について通牒をだします。もはや無法状態にかんじられます。(以上は「日本の森と木と人の歴史」の総合年表から拾う)。

18年には帝室林野局が、戦争の特別伐採を通達、19年には軍務局長が兵力伐採を指示しています。こうして19年には戦前のピーク、1億立方メートルの伐採量となります。

木が育つ100年間に社会状況の変化は大変なものでした。民衆の一員としてみれば西洋に追いつけ、追い越せの努力が戦争へ雪崩込み、遂に自壊した。明治に憧れた西洋的な論理性は身につかず、いつしか消え、自国の精神性のみを高く評価することになってしまいました。森林法の根幹にある「日本と西洋の調和」を考えた、明治の先人の論理性は西洋への対抗意識という現実の前に破綻しました。

国が破れたとき、残った山河は人の手に負えない、暴力的な自然でした。国破れて山河は残りませんでした。

(明治神宮の森)

こんなひどい社会状況の変化に耐えた森が東京にありました。森への信仰と、日本近代化の指導者、明治天皇の偉業をたたえ、大正の始めにつくられた明治神宮の森です。建設経過は詳しく記録に残っています。今、明治神宮の森は東京を代表する見事な森林です。

明治神宮内で建設以前に森があった場所は、今菖蒲が咲いているお庭のところだけで、その他は小川や畑で、大体が畑にもならない荒地でした。そこへ新しく神社、つまり鎮守の森をつくることになったのですから様々な考え方がでました。当時の総理大臣山県有朋は伊勢神宮のようにスギの木を植えろといったそうですが、学者は関東の気候とか風土とか土壌の状態とかを十分に考慮しなければ森は育たないと主張し、それにはスギはだめで、今のような森をつくることを主張し、決めました。まず大きな松、クロマツやアカマツを植え、それから何年かのちにスギやヒノキ、サワラなどを植え、同時にカシ、シイ、クスなどの苗も植えました。更に下には

灌木も植えることとしました。こういう四段階方式は当時随分と批判もあったそうです。

この計画的な植林では、100年くらいで三段目のシイ、カシ、クスあたりが大きくなって主体となろうとの予想でした。ところが100年を待たずして今のような、自然林と変わらぬ森ができました。（「神社とみどり」）

古い時代には神社には建物は無かったとされています。その森は土地、土地によって違っていたから、神社の森の作り方を特定の樹種に限るのは本来の姿ではないのは自明です。伊勢神宮を本来のものと考えた山県の考えは中央集権をめざす明治の元勳の思考であって、それが誤りであったのは、思想と技術を兼ね備えた林学者たちの先見性であり、高く評価してよいことでしょう（「神社とみどり」）。

土地にあった森林を造る技術は100年前にでき上がっていた、とっていいでしょう。

明治の森林法の考え方は基本的には正しく、それを現実に適応できなかった運営の在り方が問題だったと考えるのが自然でしょう。戦争や経済の影響さえなければ、立派な森が沢山できたろうとは、明治神宮の森が例示してくれます。

3・3 第2次大戦後の森

国の林業や森林に対する施策は林業基本法（第1次、1959年）に基づいて行われています。其の前にも第2次世界大戦による森林疲弊への対策として、造林事業の公共事業への組み入れ（1946）、水源林の整備（1949）、植樹祭による国土緑化運動の展開（1950）などが行われ、1951年頃にはほぼ戦中戦後の傷跡の補修手当てが終わったという経緯があります。

ところで1897年に出来た明治の森林法の精神は現在も生えているのです。

1951年の改正で明治の森林法は廃止、あたらしい森林法が公布されましたが、伐採の規制が厳しくなった程度で、それも今は一部緩和されました。戦後50年、いや明治から100年、日本の森林資源にたいする思想は変わ

っていなかったのです。

ところで、戦後大変な技術革新が様々な分野で行われました。資源としての森林の価値が大きな影響を受けました。

(伐採不可能の森)

今日本の山は緑に覆われています。一見結構なことですが、実は使えないから切らないのが、理由の殆どです。こんな自体になったのは、50年の変化が人知をこえたものであったのは認めてもいいだろうとは思いますが。明治から昭和まで50年の努力の失敗といい、戦後50年の失敗といい、緑の内容を上げるには歳月がかかりすぎるといふ、林業の宿命のせいと断言していいのでしょうか。

しかし森林法の精神が見事で、100年も継続しているために、多くのためらいを感じます。第2次大戦での失敗は法の無視でした。戦後の失敗はどこにありますか。

今、処置に困っているスギ、ヒノキの造林が本格的に開始したのは昭和30年(1955)ころです。その頃の行政上の出来事に「木材資源利用合理化方策」の閣議決定があります。項目は三つ①木材代替資源の使用普及②木材生産の合理化と高度利用③森林資源の開発と保全などの促進です。素人目でみて、両方に密接な関係がありそうです。

森林法の基本理念である、「地木結合論」の思想を繰り返すと、「気候、土壌、地勢など自然条件に適するように森林をきってこそ土地の生産力を最大にできる」という考えです。「木材生産の合理化」もこの考えの延長にあるべきだったでしょう。ところが、その後起きた事態から推察すると、植栽地に過去どんな木が生えていたかという調査が行われたと思えません。それより、木材生産の合理化と人間の技術力の過信で樹種の選択が行われました天然では広葉樹が生えていたところにまで、スギ、ヒノキを植えました。

1955年以後、里山(村落に近い平地に作った森を言います)をつぶしてつくったスギやヒノキは20年経過後、重要な手入れ(間伐)の時期を迎えます。しかしその経費がありません。計画の時、間伐で取り出される小

丸太が建築の足場や緑化用の資材として評価されていましたが、その時その種の用途は鉄パイプやセメント製品に代替され、無価値です。

自然に反し、しかも過密に植えたスギ・ヒノキの林は人間の助けがあって存続しうるものです。

今起きている事態の深刻さの一つは、こうした森林法の理念に反した行政処置から生まれていると、私には思えてなりません。

(経済的問題)

これだけでなく、ヒノキはスギの三倍、スギは外材の三倍といった価格体系が 1960 頃からじょじょに崩れたことにも重要な問題があります。今三者間に価格差はありません。そして輸入材は日本の需要の八割以上を満たしてしまうほどになってしまいました。

手入れが遅れに遅れ、今後そんな山の木は太くならず、真っすぐにも伸びない。日本の山の緑は不良品の在庫倉庫という側面も持ってしまいました。しかも困ったことにスギ、ヒノキは根が浅く、広く張った根で体を支える性質があり、間伐していない林では根は広がり難いから、現状では台風で倒れる危険をはらんでいます。

経済的問題には似たことがその前にもありました。カラマツの造林です。エゾマツやトドマツの生育地にカラマツは育ち、1000 メートルの高度なら本州でもエゾマツ、トドマツと比べて生育が早く、30 年も経てば伐採できます。そこで戦後、木が一本でも欲しい時期に造林が奨励されました。そして 30 年後の 1980 年、もはや戦後では勿論なく、大径木の米材、ソ連材が安く輸入され、カラマツの利用は難問となりました。今カラマツ家具などと経験のない製品として売られるのは苦肉の策の一つです。

エゾマツ、トドマツにも問題がありました。第 2 次大戦後、紙を作る原料にエゾマツ、トドマツが選ばれました。当時の技術力では繊維が長い、この二つの樹種は格別に優秀な原料だったからです。そして造林。北海道ではよく育ちます。10 年も経たぬうちに、針葉樹の繊維が長さが十分紙を作れるほどに技術力は育ちました。今は、もう木でありさえすれば原料として十分なほど技術力は高まりました。

経済性を考慮した森づくり、広くいえば人の利益を配慮した森づくりの運命は何時までたってもこんなものではないかと、私は思います。森林法の基本理念の一つ、治山、治水への利益が日本の山にはあります。必需品ですから、山の仕事は公共事業のようなものです。国土の安全を確保するために、一定の支出を覚悟して、利益がでたら、国庫に入れるという程度の発想転換をしない限り、同じことの繰り返しになりましょう。農業の保護より、遥かに薄い保護で維持されている日本の森はまさに薄氷の上に存在していると思います。そうあってはなりません。

(広葉樹造林)

森林は環境保全能力が評価され、今、広葉樹の価値が強調されさえします。特殊な広葉樹以外、日本には造林の経験がないから、様々な試みがなされているようです。立派な広葉樹の山が出来、縄文の森や照葉樹林が育つ。それでよいのかどうか。50年たったとき、それが愚策と笑われないですむか、疑問です。短視野の森林観が見え隠れしているからです。どこがおかしいか。これら全てに共通していることは、森林が地球の主人であり、その巨大な生産機能を見捨て、人類が生きて行けると思っている錯覚に気づいていないからです。

森が作るものの奪い合いが明治までの日本の森林の歴史でしたし、今も世界的にみればそうです。森を支配し生えた分を都合よい用途にかえたものが金持ちになれると考えている人が、地球規模で見れば多いし、だから森林問題が環境問題となってしまうのです。

森林という巨大の生物群と人類との関係は、普通の方法では、人は評価しえないのではなかろうか、それがここまでに述べてきた文の組立と思想の本旨です。日本では頭脳の働きが、森林の影響を、根底において受けている以上、人が森林の拡大や縮小を考えるためには、人の頭脳の本質的な働きである、アタマ、ココロを含めた精神活動で立ち向かう必要があります。精神活動の一部として西洋の科学の手法や成果を活用するのは勿論必要でしょう。しかしその結果だけに頼る皮相な合理性を21世紀の日本でとってはいけないというのが、これまで述べてきた私の気持ちです。

私たちは明治に還り、森についての知識を再構築することから始めなければなりません。

- (1) 筒井廸夫「森林文化への道」(朝日選書)
- (2) 安田喜憲「森を守る文明・支配する文明」。
- (3) 牧野和春「森林を甦らせた日本人」(NHKブックス)
- (4) ひろさちや「仏教と儒教」(新潮選書)
- (5) コンラッド・タットマン「日本人はどのように森をつくってきたのか」